研究紹介
陳篠『中国古代的理想城市—従古代都城看≪考工記≫営国制度的淵源与実践』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 満 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/25049

研究紹介

陳篠『中国古代的理想城市—従古代都城看《考工記》営国制度的淵源与実践』

谷　口　　満

日本学術振興会科学研究費・国際共同研究強化（B）研究課題「中国歴代都城の宮廟官寺・門朝城郭配置構造を正確に復原するための遺跡現地共同調査」（19KK0013・研究代表者＝筆者）の研究活動は、まもなく当初予定の研究期間を終えようとしている。この研究は課題の通り、中国都城遺跡での現地調査を主旨とするもので、三年半のうちにのべ20回ほどの中国渡航を計画していたのであるが、この間、四人の研究メンバーは誰ひとりとして渡航を果たせないできている。いうまでもなく、新型コロナ感染症の拡大により、日中の往来が不可能になってしまったからである。感染症が始まった当初は、感染の盛行期間と実質三年半の研究期間がまったく重なってしまうとは予想もしていなかったのであるが、その予想すらしなかった事態が実際におこってしまったのは、まことに残念という他はない。ただ、この文章を書きはじめている2022年12月の段階では、多くの国がこの感染症の危険度はしだいに低減していると認識し始めているようであり、各国間の往来も条件つきではあるが再開されつつある。日中の往来も半年ならずして再開されるのではなかろうか。もちろん研究期間の延長を申請するてはずであり、往来可能という朗報が一日も早くもたらされるよう、祈るばかりの毎日である。

そうはいっても、この三年間、毎日悲嘆にくれてばかりいたわけではない。本来の手段である現地共同調査が実現できないという研究活動上の空白を少しでも埋めるべく、できうる限りの活動を試みてきたつもりである。第一は、朱岩石先生をはじめとする中国側共同研究メンバーと連携して、最新の考古情報を入手しようという試みである。この点については、すでに開催したオンラインによる共催国際シンポジウム「中国都城考古学の最前線1—北魏洛陽城と東魏北斉鄴城の考古学的新発見及び韓日都城研究の現状—」と「中国都城考古学の最前線2—先秦都城考古学の新進展—」（口頭発表論文・コメント文の全部を東北学院大学アジア流域文化研究所『アジア流域文化研究』XII・XⅢに載せて公表している）、引き続いて2023年2月に開催する「中国都城考古学の最前線3—秦漢都城考古

学の新進展―」、そして 2023 年度後半に開催予定の「中国都城考古学の最前線 4―隋唐長安城と五代・宋都城考古学の新進展―」、都合 4 回のシンポジウムに成果が集約されることになっている。

第二は、最新の考古報告書やそれらに基づく都城研究書をできうる限り渉猟することである。実際のところ、近年刊行された考古報告書や都城研究書は、それこそ星の数ほど多く、すべてに目を通すことはもちろん不可能であるが、それでも重要と思われる十数部の著作を閲読して、相応の新知見を獲得することができている。それらの新知見については、そのすべてをいずれ機会をえて当然紹介するつもりでいる。

以下に紹介する陳篠『中国古代的理想城市―従古代都城看《考工記》営国制度的淵源与実践」（2021 年・上海古籍出版社）は、そのような第二の作業の過程で出会った都城史研究書である。書題のとおり、この研究書は本科学研究費の課題に深くかかわるものであり、これを紹介することは研究代表者にとって一つの責務でなければならないであろう。またこの研究書は、陳篠氏が北京大学文博学院に提出し学位をえた博士論文を整理して刊行したものであるが、その指導教員は北京大学孫華教授である。その孫華先生には上記「中国都城考古学の最前線 2 ―先秦都城考古学の新進展―」において総合コメンテーターをお引きうけいただいたが、先生はそのコメントのなかで陳氏のこの研究書に言及されているし、そもそも陳氏のために序文を書いておられるのである。孫華先生に総合コメントをお願いしたのは、朱岩石先生の慫慂によるものであり、もちろん孫華先生が目下の都城考古学の理論と実践における、代表的なリーダーであるからに他ならない。しかもその朱岩石先生と本研究課題共同研究メンバーのお一人である許宏先生は、この博士論文口述試問の委員を担当されている。本科学研究費の課題遂行に直接かかわっていただいている三先生が、あるいは指導教員としてあるいは口述試問委員として指導された陳篠氏の研究書を紹介しないでは、研究代表者として、やはり怠慢のそしりをまぬかれないであろう。

この都城史研究書は、中国歴代都城の平面構図の復原とその構図理念の考察において、最新かつ最高の到達点を示しえていると考えられ、通り一遍の紹介ではその価値を表示することがとうていできない。紙幅を大きくとって詳細な紹介を試みたいと思う。

現時点で陳篠氏と直接の連絡はとっていないが、陳氏自身の後記や裏表紙の著者紹介によると、2008 年天津大学建築学院建築学学士、2010 年同建築設計及其理論碩士、2014 年北京大学文博学院博士、2014 年～2016 年コロンビア大学人類学系ポストドクター研究員、2017 年～現在浙江大学文化遺産研究院任職という略歴であり、現在おそらく三十代後半

であろうと思われる。氏の論述には図面や計算式が多見するのであるが、それは本来建築学の専攻であったことに大きく由来するであろう。以下、章・節を追って陳氏の所論をとりあげてみることにしよう。

*

第一章　緒　　論

第一節　中国古代城市規画思想的研究基礎

この節では、既存の研究における研究方法と研究成果が整理されており、さながら中国都城構造・規画理念研究史のかなり詳細な回顧と展望となっている。まず中国の都城研究が、伝統的な中国史学を基礎として展開されてきたことを述べたうえで、従来の研究を次の三つに分類している。① 個々の都城の構造復原を最優先の課題として、その復原結果をもとに背景にある城市規画理念がどのようなものであったかを推測しようとする研究。いわば帰納的研究である。② どのような城市規画理念が存在したかを、思想史研究の一つとして明らかにすることを最優先の課題として、その明らかにされた規画理念が都城構造のどこに適用されているかを考察しようとする研究。いわば演繹的研究である。③ 異なった城市規画理念相互の思想的関係を明らかにすることを最優先の課題として、中国思想史全体のなかに、城市規画理念思想の思想体系を位置づけようとする研究。いってみれば ①・② の研究をより広く、より総合的に展開しようとする研究である。

そのうえで、① の都城構造の復原を最優先する研究については、近年ではさまざまな科学的考察手段が導入されてきていることを指摘して、20 世紀後半におけるタイラー・ヴェズレイ・ラムスッセン・ベーコンらによる北京城構造の復原作業をその例としてあげ、それが侯仁之氏や鄧輝氏らが試みた北京城復原研究の新しい取り組みに継承されていることを確認している。そして、この研究方法によってその都城規画が復原された都城の数はおびただしい量にのぼっているが、それだけに、王朝国都などの著名な都城においてはかなりの成果が得られているのに対して、各地方の都城においてはまだまだ成果が不十分であること、その都城がもっとも繁栄した時期のみの構造を対象とすることが多く、前後の時期のそれについては無視されがちであること、また、城内の構造を対象とすることが多いのに対して城外のそれを対象とすることが少ないこと、復原された城市規画理念は選定位置・規模・配置・形状などについての規画理念が個別に提示されることが多く、個々の理念を統合した総体的理念が提示されることが少ないこと、研究者相互の間に統一された考察基準がなく、したがってある同じ規画理念の評価に関して研究者間でくいちがいが生じてしまっていることなど、いくつかの問題があることを指摘している。② の都城規画理念の復原を最優先する研究については、建設方法・建設技術を主な手段に復原する研究と規画思想を主な手段に復原する研究の二つの手法に分けられると指摘する。前者の研究手法は、『営造法式』などを導入して建築基数や尺度比例基準などを設定するもので、た

とえば傅熹年『中国古代城市規画、建築群布局及建築設計方法研究』にはこの方法が多用されており、後者の研究方法では、規画思想が示されている資料として、『周礼』「考工記」・天文現象などに基づく吉祥思想・『管子』にみえる築城思想・風水思想などが用いられることが多いという。③ の研究ついては、もちろんこの方向こそが進めるべき中国城市規画理念研究のあるべき方向であり、その推進にあたっては、城市の形態・規画思想・形成の要因という三者を彼此相互関連させて考察し、時代間の差異と地域間の差異、つまり城市規画思想の変遷史と同時代における規画思想の並列的差異に配慮して研究を推進すべきであると主張している。

従来の研究を以上のように整理して、都城規画理念の研究には次の四つの問題が依然として存在していることを指摘する。第一に、復原された都城の形態と復原された都城規画理念がいずれも正しいものであるとしても、理念がどこまで実現されているかについては、その全容を明らかにするのが容易ではないという問題である。たとえば、明嘉靖年間に実施された北京外城の築城がそれであり、設定されていた理念がどこまで実現されたのかを明らかにすることは、きわめて困難である。第二に、どの都城を典型例として対象にするかは、研究者によって、つまりその研究者が用いる方法によって意見の違いがあるという問題である。賀業鉅が曹魏鄴城・漢魏隋唐洛陽城・隋唐長安城・北宋汴京城・金元明清北京城を主な考察対象にしているのに対して、傅熹年が隋唐の長安城・唐東都洛陽城・唐揚州江都城・渤海上京城・元大都北京城を主な考察対象としているのが、その例である。第三に、都城の形態を復原するにあたって、その都城の最盛期の状態をのみが対象とされて、前後の時期の考察がないがしろにされる場合が多いという問題である。第四に、都城規画思想の実現といっても、対象となる都城が国都か地方の都城か、先秦以前の都城か秦漢以降の都城か、そして無主の空地に建設された新建の都城か旧来の都城遺跡を利用して建設された改建の都城かによって、それぞれ様相はそうとうに異なるはずであるのに、なぜかこのことがあまり意識されてこなかったという問題である。

第二節　理想城市的本文淵源―≪考工記≫理想規画考弁。

この節ではもっとも重要な文献資料である『周礼』「考工記」の資料的性格について、従来の所説が整理され、陳氏の評価が提示されている。まず成書年代と記述の性質については、成書は少なくとも戦国時代より遡ることはなく、その記事は春秋以前―西周時代に実際に存在した都城規画を記したものではなく、実はいまだ完全には一度も実現されたことのない理想としての都城規画を記したものに他ならない、というのが陳氏の基本的意見である。そして、「考工記」に示されているのは戦国晩期の儒家が提出した都城構造の理想型であるという意見と、そうではなく「考工記」に示されているのは前漢時代為政者の理念型であるという二つの意見については、どちらが正しいか判定するのは困難であるとしている。

ついで「考工記」“匠人”条の文章が示すところについて精密な解説が加えられる。はじめに“方九里”＝一辺九里の正方形の中に、縦・横9条の街路、祖（宗廟）・社（社稷）・朝・市が配置されていることを確認したのち、従来の諸説がかかげている「考工記」“匠人営国”王城規画図のうちから代表的な9図をかかげ、それぞれ相互の共通点や相違点を細かく比較検討して、もっとも重要な異同を説明するために次の3図を掲げている（図1-6、陳氏による図版表示番号。以下すべて陳氏の図版表示番号を使用する）。

陳氏によれば、「考工記」の王城規画には、その数値計算の根底に“設計模数”があるという。いわば基本定数ともいうべきものであり、「考工記」の場合、それは一定面積の正方形に他ならず、従来の諸説には“一里四方”の正方形かもしくは“三里四方”の正方形か、二通りの意見があるという（図中の上の図が“一里四方”の正方形、下の図が“三里四方”の正方形を基本定数としている）。そして一里四方定数説の背景には、中国都城の里坊区画（居住区画）は通例一里四方であるという事実があり、三里四方定数説の背景には、正方形を井字によって九等分する“井田制”などの理念があると説明している。「考工記」が用いている基本定数は“一里四方”正方形なのか“三里四方”正方形なのか、陳氏自身の意見はここでは表明されていないのであるが、この“設計模数”（基本定数）という指標は、以降、本書の論述において一つの基調指標となっていくことになる。

第三節　理想規画的実践成果—城市考古方法及材料

この節では、従来の諸研究の成果を整理して、資料の多寡・精度からいってどの都城を研究の主たる対象にすべきであるかを説明している。はじめに夏商周＝遠古段階、秦～両漢＝上古段階、魏晋～五代＝中古段階、宋～清＝近古段階という分期に従うことをことわったうえで、本研究が中国古代の理想城市としてとりあげる主な都城は、原則として次の三つの条件を備えていると表明している。第一は、既存の城市の上に建設されたものでない、いわば無主の空地に建てられた新建の城市であり、しかも地勢からの拘束や制限をほとんど受けない場所に建設された城市であるという条件である。第二は、「考工記」の都城規画理念にある程度合致する構造をもっているという条件である。第三は、国都など、ある時代の都城規画理念を代表的に表示しえている城市であるという条件である。

そして、この三条件についてそうとう詳細な議論を展開したのち、既存の考古資料による限り、三条件を満たしているのは中古時代の北魏洛陽城と曹魏東魏北斉の鄴城、隋唐の長安城、近古時代の明の中都城であることを指摘している。また、陳氏自身の調査・考察によって獲得した新たな調査資料・考古資料を導入すれば、魯都曲阜城と元の中都城が三条件を満たすことになると判断している。つまり本研究は、この6都城遺跡を主な考察対象として推進されると表明しているのである。

第一章緒論には、実に42ページの紙幅が割かれていて、その論述はそうとうに詳細であるが、ただそれぞれの論点について陳氏の意見が明確に示されているわけではない。も

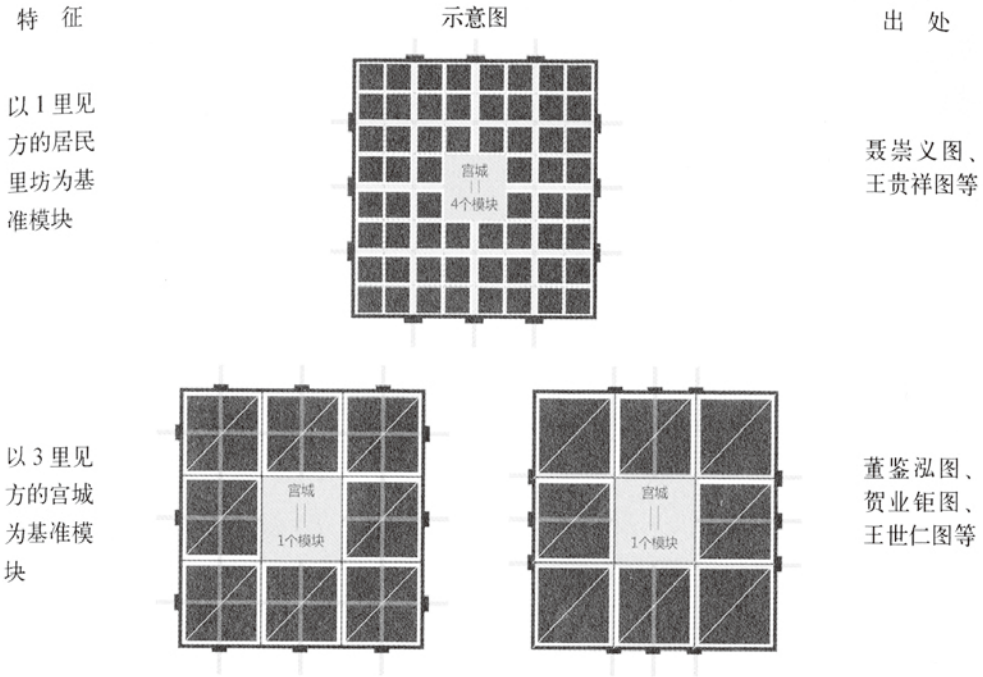


图 1-6　《考工记》理想规划・城市模块的两种可能情况

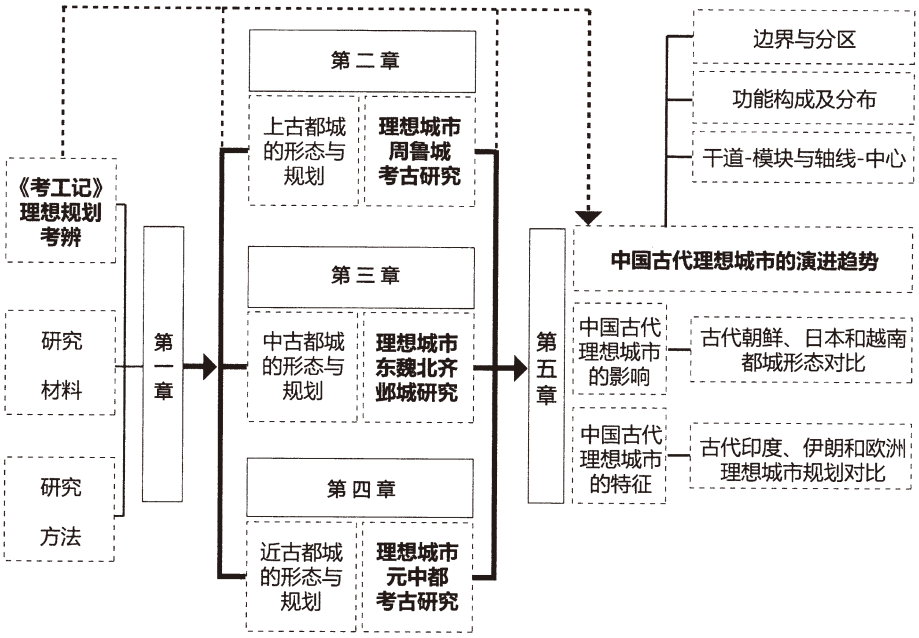


图 1-8　本书研究框架

ちろんそれは陳氏が判断を回避しているわけではなく、以下の二～四章で実施する実際の考察において、最適と考える方法と理論の実例を駆使することを通して、結果として自身の判断を示そうとしているのである。

第四節　小結

この節では本章に示した著者の意図を明確にするために、本書の研究構想を図示で掲げている（図 1-8）。

第二章　中国上古時期的理想城市

第一節　周代以前的都城形態

この節では、二里頭城址、鄭州商城、偃師商城、洹北商城（殷墟遺址を含む）をとりあげ、宮殿区の配置位置とその構造を中心に考察を試みており、その結果注意すべきものとして次のような点をあげている。① 二里頭城址の 2 号宮殿内部と洹北商城の 1 号宮殿庭院からは高級クラスの墓葬や祭祀坑が発見されており、宮殿の主たる機能が祖先祭祀儀礼の場所であったことが知られる。ただし、その宮殿のなかのどこが王の居室でどこが祭祀場であったかは判然としない。② 二里頭城址の城内には、直角に交わる街路の遺構が確認される。また近年発見された新鄭望京楼城址でも、その二里崗段階の情況にやはり直角に交わる複数の街路を確認することができ、城内をあたかも井字形のように 9 個の区画に区分していたと思われる。城内に直角に交わる街路を設置するという後世の中国都城に見られる構造は、早くも夏商時代から始まっていたのである。③ 二里頭城址と商代城址の一つの相違は、二里頭時代には見えていなかった外城（外郭）が、商代城址には見えていることである。鄭州商城の内城（周長 6,960 m の大城壁）を囲んでその外側に広がる城壁がそれである。これは、その都度の必要に応じて宮殿区→内城→外郭と時間をおって建設していった結果であり、宮殿区・内城・外郭の三者を整合的に設置すべきであるという理念が当初から存在し、それを実現した結果であるわけでは決してない。

第二節　周代前期的理想城市

この節では、まず周原城址（岐邑）、酆・鎬、東都洛邑（成周城）をとりあげて、その構造を論じている。このうち、洛邑については、漢魏洛陽城の下部に存在したことが確認されているいわゆる韓旗故城をとりあげ、これが成周城なのかあるいは他の西周都城なのか、諸説紛々としており、異論決しがたいとしている。ただ、これが洛陽地区におかれた西周時代建設の都城であるという点では諸家の意見は一致しており、したがって周代前期都城の一つとして考察すべきであるというのが、陳氏の立場なようである。周知のように酆・鎬二城からは城壁が発見されておらず、洛邑成周城の位置・内容もはっきりしていな

いなど、資料的な制約は大きいが、陳氏はそのような情況を十分承知したうえで、西周時代都城の構造には次のような特点が認められると指摘している。① 遺址内部には、居住集落・墓葬・祭祀区・手工業区などが、いわばランダムに散在しており、計画的な配置の痕跡がみられない。またどこまでが都城の範囲なのか、その境界も不明である。② 周原遺跡の鳳雛建築群を囲むように存在していると考えられる長方形の城壁、韓旗故城址の中央部を占めている西周時代の長方形城壁は、いずれも東西が南北より長い形状をとっている。ちなみに西周早期の燕国都城と目されている北京琉璃河董家林城址の城壁も東西が南北より長い長方形である。この形状は西周時代都城に通行して見られるものかも知れない。③ 夏商時代の宮殿遺構が回廊が庭院をロ字形に囲む構造をとっているのに対して、周原雲塘・斉鎮の宮殿遺構に見られるように、周代に入ると三つの宮殿が品字形に配置され、庭院がごく狭くなる構造をとるようになる。この構造はまた、秦雍城内の馬家荘 1・3 号建築群や晋都新田城の呈王路 13 号地点建築群にも見られ、周代以降通行の形態となったと思われる。

そして本書が主要な対象としている 6 都城のうちのはじめの一城、魯国都城曲阜城の構造分析が進められる。周原・酆鎬・洛邑という国都は、いずれもその都城構造を復原しうるほどには考古資料が堆積していない情況にあって、唯一魯都曲阜城こそはその資料的空白を埋めうるに足る考古資料をもっているというのが陳氏の目のつけどころなのであるが、具体的には次の三つがこれに目をつけた理由となっている。① この都城の始建時期、城壁の出現時期が周原・洛邑（韓旗西周故城）などのそれにほぼ重なり、西周時代都城の構造復原にあたって、時代的に格好の類推事例とみることができる。（曲阜城大城壁の築城時期は、遅くとも両周の際であると考えている）。② 残存する曲阜城の大城壁は、周原鳳雛建築群を囲む城壁、韓旗西周故城の城壁と同じように、東西が南北よりやや長い長方形であり、形状的にも格好の類推事例とみることができる。③ 魯は周知のように周公旦が封じられ、その子伯禽が建国した国である。つまり、列国のなかでは周の制度をもっとも忠実に実施していた国であったはずであり、都城構造の実現においても周の制度を強く反映している可能性が高い。

このような意図に基づいて進められる陳氏の曲阜城分析は、しかし、既存の考古資料のみを使用したものでは決してない。山東省文物考古研究所・山東省博物館・済寧地区文物組『曲阜魯国故城』（斉魯書社・1982 年）などの既存考古資料を十分に活用しながらも、それよりもむしろ陳氏自身が現地調査を実施して新たに獲得した考古資料が、より重要な分析資料として活用されているのである。その調査は、周公廟廟門台基の西南角を測量基点として、GPS などの最新技術を駆使して曲阜城内の夯土基址・居住址・墓地・作坊遺址・城壁遺址などの存在地点を再調査しようとするものであり、その結果多くの点において既存の考古知見を修正しているのみならず、あわせていくつかの新知見を提示しているのである。陳氏のその調査過程における、方法と実践にともなう苦心と努力の様子は、およそ

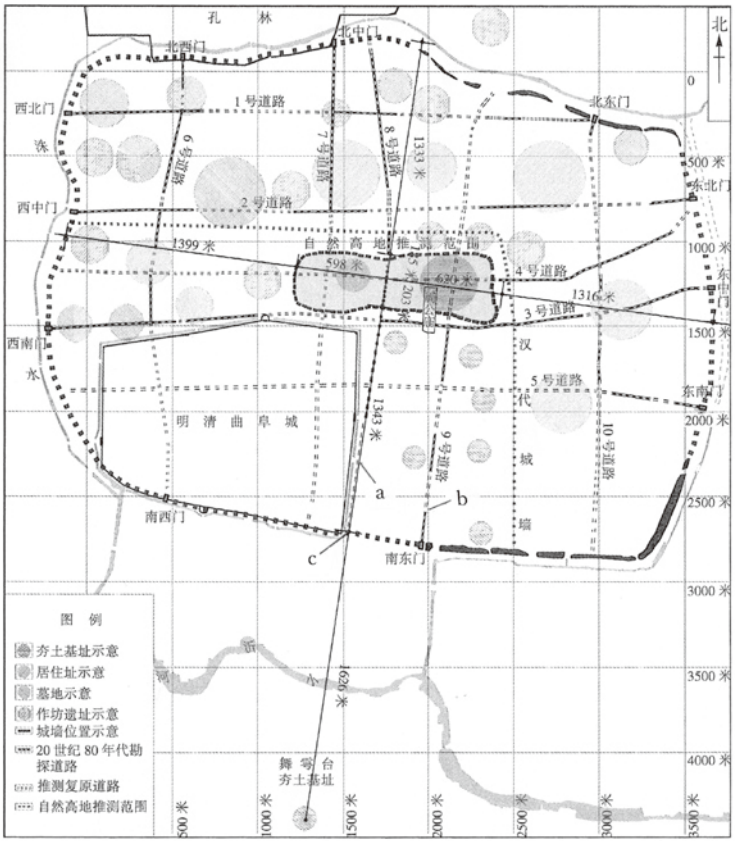


图 2-26 周鲁城自然高地与城垣、干道空间关系示意图

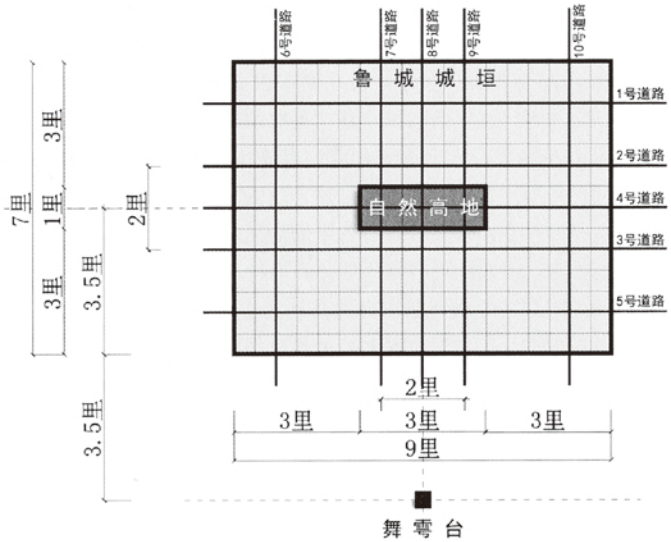


图 2-27 周鲁城规划方案推测

5ページにわたって詳説されており、ここだけでも読み応え十分な内容になっている。

こうして、図2-26が曲阜城の陳氏復原図として掲げられることになる。ほぼ真ん中に位置している“自然高地”を、陳氏はこれこそが“曲阜”であるとみなしており、もちろん宮殿建築などを囲む内城壁が存在したと考えている。そのほぼ中央から城外南部の舞雩台に至る直線が南北主軸線であり（→a)、従来一般に通行してきた周公廟―南東門―舞雩台を南北主軸線とみる意見（→b）は否定されることになる。もちろん陳氏のいう南北主軸線が南城壁を切るところには（c)、いわば南大門が存在したと想定しているのである（→a・b、cは筆者がつけたもの)。そのうえで、曲阜城は、中央に位置する自然高地＝内城と南北主軸線をはさんで、居住区・墓区・手工業区などが南・北あるいは東・西対称の位置に設定される、整然とした城市プランをもって造成されたと結論づけている。内城・街路・各エリアをこれほどまでに詳細に復原した例は、少なくとも先秦都城に限っていえばほとんど空前といってよいであろう。

この復原図だけでも十分斬新な意見なのであるが、陳氏はさらに重要な推測図を提出して、自説を進展させている。それが図2-27である。曲阜城は東西9里・南北7里の長方形プランをもって造成されたとみるのであり、もちろん現存する城壁は完全な長方形を呈してはいないが、それは実現の過程で地勢などの影響を受けたやむをえない結果であり、規画理念そのものは確実に9里―7里の長方形であったと想定しているのである。そして、図2-27をもとに次のように指摘している。① 曲阜城は東西9里・南北7里の規画理念をもって造成されているが、南北が9里ではなく7里であるのは、9里から一等減じたものであると思われる。それは、曲阜城が諸侯の都城であるため、周王都城の九里四方から南北の長さだけを一等減じた可能性が高い。② 一辺に三門、宮廟は中央に、南北中軸線の設定など、曲阜城の規画理念には、「考工記」都城規画の要素をかなりの程度見ることができる。③ 曲阜城の城市規画は、一辺一里の正方形を基本定数として設計されている。

要するに、陳氏は「考工記」の成書を少なくとも戦国時代以降と考えているのであるから、その成書以前、具体的には曲阜城が完成した両周の際以前に、「考工記」都城規画理念ときわめて近い理念が存在したことを指摘していることになる。これはきわめて重要かつ斬新な意見といわねばならないであろう。

第三節　周代後期至秦漢都城的規画

この節では、春秋時代中期から秦統一に到る時期と秦漢時代にわけて、都城構造の様相をその変化に視点をおいて説明している。

まず前者については、王朝国都と諸侯都城によってかなりの相違があり、また時代による変化もしばしばみられる春秋～戦国時代の都城を通観して、戦国後期にかけて多くの都城が“城郭併立型”に収束していくことを指摘している。陳氏によれば、外側の大きな大城壁が存在するかしないかにかかわらず、都城エリア内に宮殿区・一般居住区・貴族層墓

区・一般層墓区・手工業区などが混在する情況が元来の構造であり、氏はそれを君主・貴族層のための機能区と一般民のための機能区がいわば共存している情況であるとみなしている。(外側の大城壁が存在しない場合を“宮城聚集型”、存在する場合を“城宮相套型”とよんでいる)。

ところがしだいに君主・貴族層のための機能区と一般民ための機能区がはっきりと分離するようになり、ついには両者の機能区がそれぞれ別個の城壁で囲まれるようになり、ここに城(君主・貴族層機能区)と郭(一般民機能区)が別個に並ぶ“城郭併立型”が登場するというのである。南北の隔壁で城と郭を完全に分離してしまった韓国都城(いわゆる鄭韓故城の韓都時期の様相)や、従来の大城壁西南部をきりとって城を造成し、その城と郭(従来の大城の残った部分)を完全に分離してしまった斉都臨淄城がその代表例としてあげられる。もちろんそれは、戦国時代に顕著になる君主権力の強化=支配・被支配の峻別化という事情に対応していると、陳氏は指摘している。

ついで後者については、秦咸陽城・前漢長安城・後漢洛陽城の構造分析に基づいて、基本的には戦国時代の君主権力の強化=支配・被支配の峻別化がさらに進行し、君主・貴族層の機能区がより一層肥大化・拡大化して、都城内部の面積は宮殿区・官庁区でほとんどが占められるようになり、それに比べて一般民の郭域はその境域も不明なほどに外部に追いやられるようになってしまったと指摘している。秦始皇帝による咸陽城の改造や前漢武帝による長安城の改造が、その事情を典型的に示すものとして取り上げられている。

戦国から秦漢にいたる、君主・貴族層機能区=城のこのような肥大化・拡大化は、当然のことながら周代前期の魯都曲阜城においてある程度実現された「考工記」的な都城規画理念の実現をさまたげることになったはずであるが、ただその理念がまったく無視されたわけではないことも陳氏は指摘している。戦国列強都城・前漢長安城・後漢洛陽城には確かに南北主軸線の存在を確認することができるし、王莽によって実行された長安城における宗廟・社稷・各種礼制建築の建造や、それを受けたと思われる後漢洛陽城における礼制建築の建造にも、多かれ少なかれ「考工記」の都城規画理念を意識したものがあったと判断しているのである。しかしそうはいっても魯都曲阜城レベルの理念実現事例は、周代後期から後漢洛陽城にいたる各都城には一例も見出すことができず、それは諸侯権力・皇帝権力の集権化・強権化が儒教的な都城理念の実際の都城構造への応用を阻んでいたためであろうと結論づけている。

第四節　小結与討論

この節では、まず、「考工記」成書時期ごろの儒家学者たちにとって、魯都曲阜城こそがその儒家思想的理想城市の構造を模索するにあたっての、唯一のよるべき実例であったことが強調される。ついで、戦国時代以降はむしろ儒家思想的理想城市構造の影響が小さくなっていき、前漢長安城以降になってようやくその影響のきざしが見え始めているので

はないかと推測している。

第三章　中国中古時期的理想城市―以東魏北斉鄴城、隋唐長安為例

第一節　三国両晋南北朝的都城形態

本節では、都城規画理念が、曹操の鄴都建設（鄴北城）→魏明帝の洛陽城改造→北魏孝文帝の洛陽城改造→東魏北斉の鄴都拡建（鄴南城）と継承されたであろうという想定のもとに、この 4 都城と六朝建康城及び前涼の姑臧城・孫呉政権の京城と武昌城・赫連夏国の統万城・西魏北周の長安城について、それぞれの構造復原が試みられる。

このうち主要な対象となる鄴城・洛陽城については、鄴城考古隊・洛陽考古隊による発掘調査成果を十分に利用しつつ、詳細な構造復原を試みて、戦国～秦漢の各都城とはうって変わって、「考工記」的な都城規画理念がそうとう程度反映されていることを指摘している。

＊なお洛陽城銅駝街の南端にある宣陽門が、また“国門”とも呼ばれたと記述しているが、その記事はどこに存在するのであろうか。陳氏自身あるいは他の方からでもご教示いただければ幸いである。

そして、後漢洛陽城のいわゆる大城がほぼそのまま曹魏・北魏洛陽城の内城として利用されているという点では、洛陽考古隊研究者などと意見を同じくしており、内城があるからには外郭があったはずであるという想定のもとに、外郭の四囲とそのなかの里坊の配置を精密に復原している。

第二節　南北朝時期的理想城市―兼探東魏北斉鄴城的外郭辺界

本節では、とくに鄴城をとりあげて鄴北城→鄴北城＋鄴南城の順にきわめて詳細な構造分析を試みている。鄴北城も鄴南城もいずれも、とりわけ鄴南城はいわば無主の空地に建設されており、理想的規画理念の実現がより容易であったろうとの理由からである。

まず鄴北城については、中陽門―司馬門―宮城主殿という南北中軸線をもつ、東西ほぼ正対称の整然とした構造を復原し、ついで鄴南城についても、やはり朱明門―宮城南門（陳氏は言及していないがこれは閶闔門であろう）を南北主軸線とする、きわめて整然とした対象構造をもつ平面図を復原している。そして、鄴南城の外郭城を四辺約 9,000m＝約 20 里の正方形であろうと推測する鄴城考古隊の意見を受けて、その東西南北の辺界地点をさらにくわしく探索しているのであるが、その際、探索の方法として使用しているのが、都城中心点の設定という視点である。次の三つの図に示されている視点がそれである。図 3-21 は鄴北城の中心点が司馬門であることを示しており、図 3-22 は北魏洛陽城の中心点が閶闔門であることを示しており、図 3-23 は鄴南城時期の中心点が宮城南門（閶闔門）であることを示しており、外郭の四辺・四コーナーはこれらの中心点から必ず等距離にな

ければならないというのが陳氏の視点である。（今少し正確にいえば、中心点は門そのものではなく門前の広場であると、陳氏は説明している）。この視点を大前提に、三城のうちその外郭四辺界がもっとも不明瞭な鄴南城時期のそれについて、その探索を試みているのである。探索の推移は詳細かつ精確であり、本書のなかでもやはり読み応え十分な論述の一つであるといってよいであろう。こうして復原された鄴南城時期内城外郭配置図が図3-27である。一辺20里の正方形という従来の意見は、東西20里・南北16里の長方形という意見に修正されているけれども、それを除けば考古隊の意見とほぼ同じであり、それはまた考古隊の推測がそうとうに正しいものであったことを裏付けているであろう。

なお、図3-27を一見して明らかなように、外郭構造復原にあたって陳氏は一辺一里の正方形を基準格として採用している。言い換えれば、陳氏は鄴南城時期の内城外郭配置は、一辺一里の正方形を基本定数として設計されていると考えているのである。それは一里の長さこそちがえど、魯都曲阜城の基本定数と同一であり、きわめて興味深い指摘であるといわねばならない。いずれにしろ、陳氏によって復元された鄴南城時期内城外郭配置を前にすれば、それが「考工記」の都城規画をかなりの程度実現したものであるという陳氏の主張も、むべなるかなと思われてこざるをえない。

第三節　隋唐都城規画対東魏北斉鄴城的継承与創新

本節では、「考工記」都城規画理念の一つの到達形が出現したという認識のもとに、隋唐長安城と隋唐東都洛陽城の平面構造が取り上げられている。

まず、隋唐長安城については、隋大興城（長安城）の建設にかかわった高熲・宇文凱・劉龍などが北朝にゆかりの深い人物であったことからしても、北朝の都城、なかんずく東魏北斉鄴城の構造を継承していることはまちがいないとみて、その主な継承点として次の5点をあげている。① 宮城・皇城を外城（外郭）内の北端におき、その南・東・西の街区を外郭で囲む構造をとっている。② 外郭内の東西にそれぞれ市を設置している。③ 宮城・皇城・外郭の中心を貫く南北主軸線が設定されている。④ 多数の寺観が南北主軸線を挟むように配置されている。⑤ 東に宗廟、西に社稷を配置するなど、礼制建築が所定の場所に配置されている。

もちろん東魏北斉鄴城には見られない、新しい措置も実行されているのであって、その例として、陳氏は次の4点をあげている。① 皇城内を8個の区画に分けて、各区画に宗廟・社稷とともに六省・九寺・一台・四監・十八衛などの中央官署を整然と配置している。② 曲江池などの公共園林施設を設置している。③ 大明宮や興慶宮を新造することによって、従来の中央南北主軸線のほかに、大明宮含元殿—慈恩寺を結ぶ今一つの南北軸線を設定している。④ 各種圓丘の設置、国子学・孔子廟・周公廟の設置、一皇帝の単独宗廟の設営など、宋・元以降の都城に継承される諸施設の配置をはじめて実施している。

東都洛陽城については、洛水の水運を十分利用できるように都城構造が設定されており、

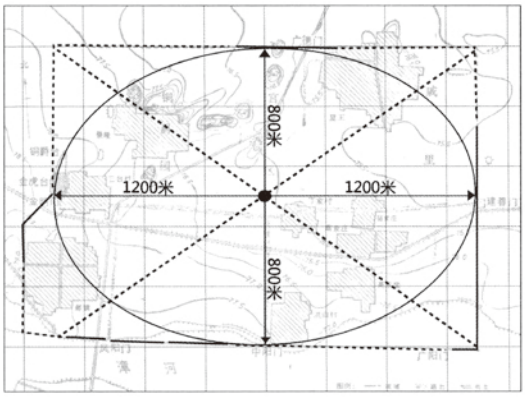


图 3－21　曹魏邺城几何中心分析图①

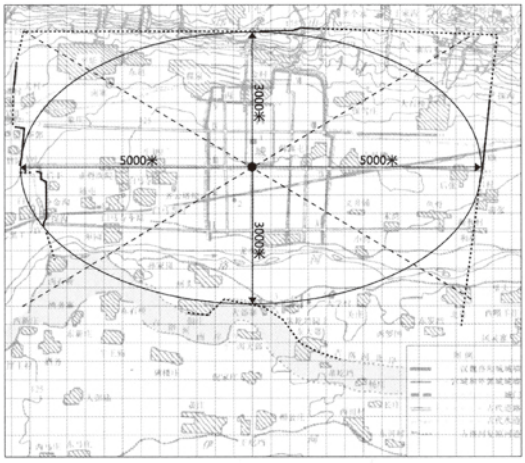


图 3－22　北魏洛阳外郭城几何中心分析图②

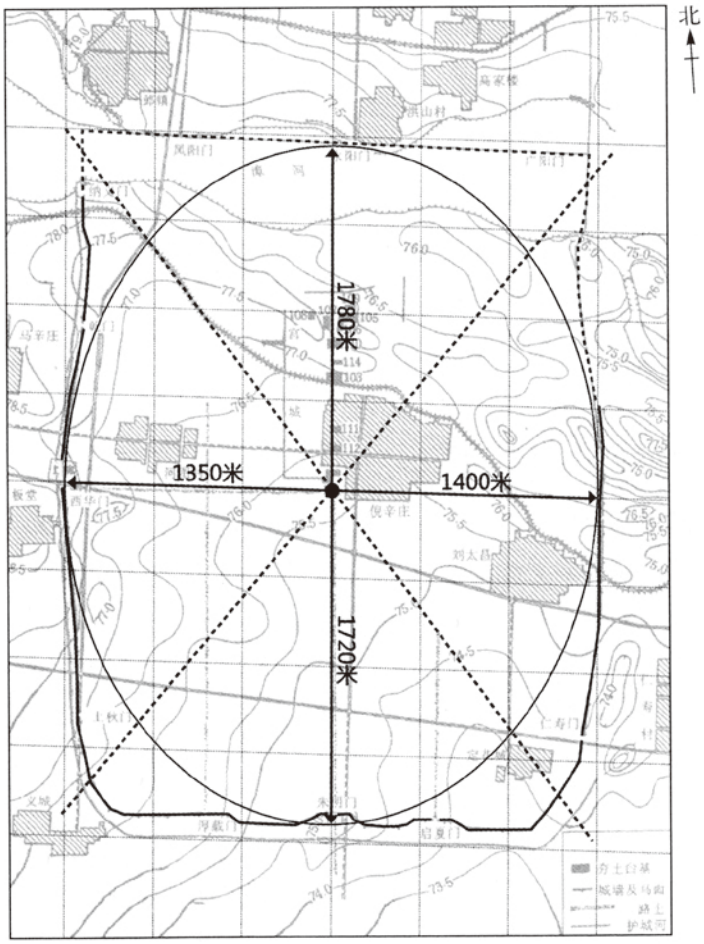


图 3－23　东魏北齐邺城南城（内城）几何中心分析图②

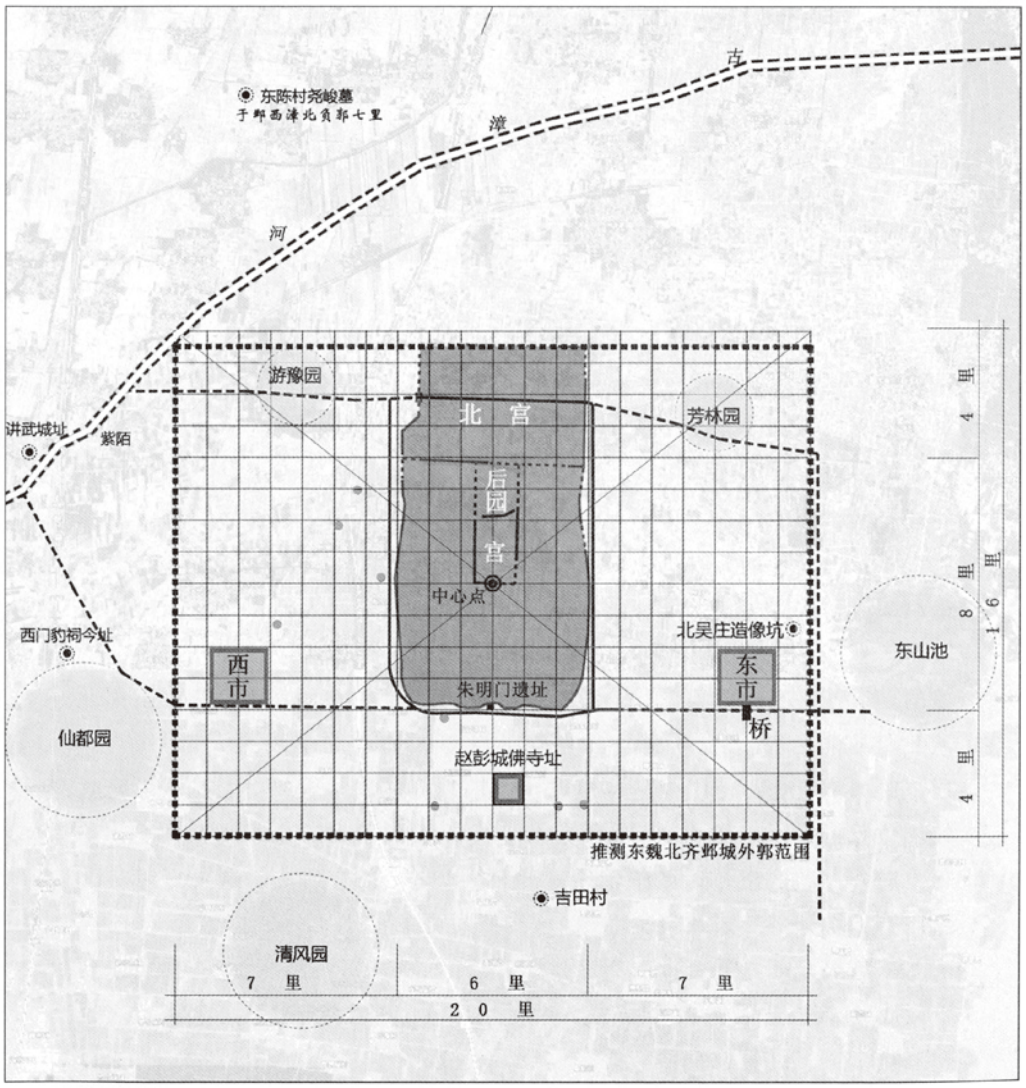


图 3-27　东魏北齐邺城外郭城推测复原图

その制約から、長安城ほどの整然さはもっていないけれども、全体としてみればやはり碁盤目の正方形を呈しており、「考工記」の都城規画がかなりの程度実現されていると指摘している。

注目すべきは、長安城の設計計算法の復原である。長安城構造の整然さからすれば、綿密な規画理念と規画方案があったことは確実であり、そしてその理念・方案を裏づけ、実現を可能にしていた設計計算法があったこともまた確実であると考えて、陳氏はその設計計算法を復原しているのである。その設計計算法とは具体的にいえば、それはもちろん魯都曲阜城や東魏北斉鄴城でも使用されている、長さ・面積を決定する際の基本定数ということになる。長安城のその基本定数の復原にあたってよりどころとしたのは傅熹年氏の提示した基本定数であるが、傅氏の復原方法を大要としては支持しつつも、細部においてはいまだ解決されていない問題があると判断して、日本平城京や渤海上京の事例も参照しながら、“執念深い” ほどの解析を繰り返して、ついに図 3-37 と図 3-38 を解答として提出している。

陳氏によれば、基準となるのは宮城の面積である。宮城の面積は一辺 500 丈の正方形二つからなりたっており、この一辺 500 丈の正方形が設計計算の基本定数に他ならない。ついでこの基本定数をもって宮城面積と同じ面積の、つまり基本定数二つ分の皇城が設定され、さらにこの基本定数でもって 26 個の大坊区が設定される。ただそうすると、長安城の東西 3,300 丈・南北 2,900 丈を 500 丈で割ると余りがでてしまい、不具合が生じることになってしまう。そこで、陳氏は南北に幅 100 丈の道路が 2 条、幅 50 丈の道路が 2 条、東西に幅 100 丈の道路が 4 条通っていたと想定して、割り算の余りはその道路分であると説明しているのである。なんど読み返しても、陳氏のこの発想には感心させられる。読者諸賢には、陳氏が試みたこの解析の過程をぜひ熟読していただきたいと思う。

ともかくここに、魯都曲阜城・鄴南城の設計基本定数が一辺 1 里の正方形であるのに対して、一辺 500 丈の正方形という設計基本定数が新たに想定されたことになる。その理由を、陳氏自身は、隋唐長安城ほどの広い面積をもった大規模都城となると、一里四方では基本定数としては小さすぎて設計に不便であり、より大きい 500 丈四方が採用されたのではなかろうかと推測している。

第四節　小結与討論

この節では、まず本章の考察を要約したうえで、とくに東魏北斉鄴城をとりあげ、鄴南城だけを内城とみるか（この場合、鄴北城の部分は北郭となる＝より「考工記」的都城規画に近い）、鄴北城と鄴南城を合わせたものを内城とみるか（この場合、内城北城壁外郭北郭壁はかさなり、北郭エリアは存在しないことになる＝より「考工記」的都城規画から離れる）という二つの意見が考えられるが、おそらく後者であろうと推測している。それは「考工記」の都城規画を意識しつつも、それにはかかわらない独自性を発揮させようと

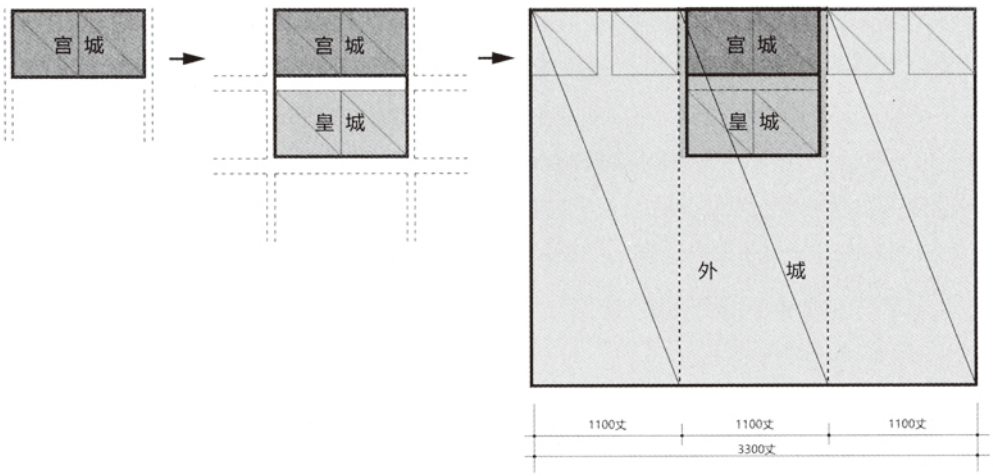


图 3-37　隋唐长安规划过程分析（第二种可能的情况之二）

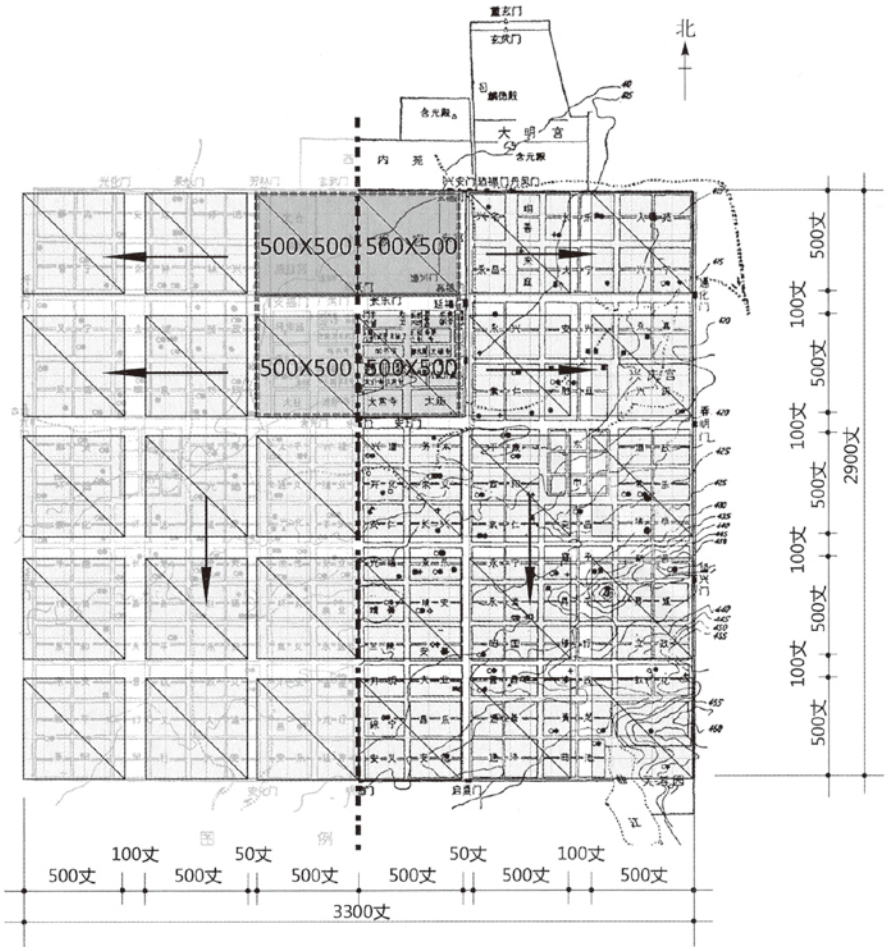


图 3-38　隋唐长安设计模块分析（第二种可能的情况之二）①

する意図によるものであり、この事情は隋唐長安城にも受け継がれているというのが、陳氏の意見である。

第四章　中国近古時代的理想城市—以元中都和明中都為例

第一節　五代至宋元的都城規画

本節では、中古時代から近古時代への社会変化が都城構造にどのような影響を与えているか、また北方遊牧民族によってうち建てられた都城の構造はどのような特色をもっているかを視点に、五代から元にいたる各都城の構造分析が試みられている。

はじめに唐末韓建によって改築された長安城と後唐時代に内部改造が試みられた洛陽城が取り上げられ、坊制の崩壊といった近古的情況がみられることを指摘する。

ついで五代から北宋に至る汴梁城が取り上げられ、① 宮城・内城・外城の三重配置、② 坊制のほぼ完全な消失、③ 皇宮大内から外城南城壁南薫門にいたる南北主軸線と、その左右に整然と並ぶ宮殿・官庁の配置、④ それぞれの皇帝個々ごとの祖廟の設置、道観への先皇塑像の安置などの祭祀施設の特殊な配置、を特色としてあげたのち、新街口発見の城門遺跡が全城の中心点であった可能性が高いことを指摘している。

次に取り上げているのは、遼・金・元という北方民族王朝の都城であり、遼の上京や金の上京では遊牧民族政権集団の居城と漢族をはじめとする被支配民族の居住地がはっきり分離されているが、遼の中京・金の中都・元の上都になると、宮城と内城がまた内城と外城がその城壁の一部を共有するなど、完全な形状ではではないものの、政権集団（内城）と被支配者（外城）が一つの大城壁内に共存する中国王朝風のいわゆる内城外郭配置が見られるようになると指摘して、元上都の構造の一部には北宋汴梁城のそれときわめて類似したものが存在することなどを証左に、それはいうまでもなく北方民族政権が中国風都城の構造を意図的に採用しはじめたことを意味していると結論づけている。

そしてそういった中国風への傾斜の流れの帰結としてあげられているのが、いうまでもなく元の大都である。元の大都は、「考工記」都城規画の典型的な実現例とみなされることが多く、陳氏自身もその意見には何の異論もないのであるが、しかしまた、理想からはずれた情況がいくつか見えることも確かであって、陳氏はたとえばその例として次の点をあげている。① 内城が南に寄りすぎており、しかも湖沼をその中に取り込んだため、内城西城壁が西に寄りすぎてしまっている。② 当初各官庁を実際の使用に適さない場所に配置してしまったため、職務遂行上不具合が生じている。③ 万寧寺—麗正門を結ぶ南北中軸線と鼓楼—外城北城壁を結ぶ南北中軸線が、160 m ほど東西にずれていて、せっかくの南北中軸線が一本の線分になっていない。このような理想からはずれた情況が生じてしまっているのは、金中都の旧跡を利用したため旧建築配置の制約を受けざるをえなかったこと、そもそも自然地形の制約を受けざるをえなかっこと、遊牧政権のもつ独自性から影

響を受けざるをえなかったことなど、そういった理由からであろうと想定している。

第二節　近古時期的理想城市—元中都的考古調査与復原研究

本節では、元の中都が取り上げられ、陳氏自身の現地調査結果を主要な手段に、その平面構造の復原が試みられている。

元の中都とは、武宗の時に建造がはじまり、次の仁宗が未完成のうちにその建造を中止してしまった都城であるが、のちしばしば行宮として使用されたと伝えられている。元末以降は廃墟化をたどり、明代になると泥砂におおわれてその遺跡は“沙城”と呼ばれたという。その位置は、大都の西北・上都の西南にあたり、現在の張家口市張北県西北約15 km の白城子城址がその遺構である。

陳氏によると、元中都遺跡の平面構造復原は、次のような理由から中国都城構造研究のなかでも、とくに重要な研究課題となっているという。① 元の中都の構造は、大都のそれを模範としたところが多いといわれている。大都自身が「考工記」の都城規画をかなりの程度反映しているといわれているのであるから、中都も当然その可能性が高い。② 元の中都は広い草地に建設されており、いわば無主の空地に建設されたのであるから、地勢からも旧跡からも建設上の制限をほとんど受けなかったはずであり、理想的な規画がより実現しやすい条件にあったと思われる。③ 元の大都はその都城規画において、歴代都城中屈指の整然さを備えていたといわれるが、その建設物配置の様相についてははっきりしないところが多い。中都の平面構造復原の結果は、大都の不明な点をはっきりさせることになる可能性がある。

さて、この節の叙述には実に 33 頁の紙幅が割かれている。魯都曲阜城や鄴南城や隋唐長安城についての論述においても、そうとうな紙幅が割かれていたのであるが、そのどれにもまして大量の叙述量であるということができる。元の中都遺址については、河北省文物研究所などの発掘成果をまとめた『元中都：1998～2003 年発掘報告（上･下）』（2012 年･文物出版社）をはじめとしてすでにいくつかの考古報告が出されていたのであるが、その成果によりつつも、陳氏は自身でさらに綿密な現地調査を行い、その新成果の内容とそれに基づく陳氏自身の平面構造復原作業を逐一詳細に論述しているため、その論述にふさわしい紙幅が必要となったからである。その現地調査は 2012 年秋に実施されたものであるが、ドローンや GPS を駆使した最新の手段が導入されており、魯都曲阜城のそれと同様、陳氏の目論む手法がもっとも有効に発揮されたものである。図 4-22 元中都内城隆起高度分類・図 4-23 元中都内城隆起遺迹現象分類・図 4-25 元中都内城遺存類型示意図・図 4-27 元中都鑽探範囲示意図・図 4-28 元中都鑽探成果示意図などを並べてたたみかけるように展開される議論はまことに圧巻であり、おそらく読者はこの叙述部分だけでも、考証の妙味を十二分に味わうことができるであろう。

その結果として、復原された宮城とそれを囲む内城内の建築配置が図 4-29 である。工

字形宮殿を中心に、各建築物が東西対称の場所に整然と配置されていることが一目瞭然であろう。そして後宮の北側、東西楼の外側、つまり宮城内辺縁部の用途について次のような復原を試みている。陳氏はまず、決定的な相関資料として、主に文献伝承を手段として復原されている、元大都宮殿区の機能別配置図（図 4-24 元大都宮殿功能布局規制示意図）を持ちだしているが、陳氏の復原した元中都宮城内の各エリア配置情況が、元大都宮殿区各エリア配置情況とほぼ完全に重なることは、一見して了解される。陳氏はこの相似をもとに、中都宮城内の辺縁部は、大都のそれと同じく、東北部と西北部は妃嬪の居所、宮城南半の東側は酒房と庖室、西側は庫坊と宿衛であろうと想定しているのである（北半の中央部は大都では複数の宮殿が配置されたエリアとなっているが、中都ではその機能が推測できないとして、陳氏はそこを空白にしている。図 4-26）。これはまことに見事な復原作業であるとしかいいようがない。文献伝承による大都の情報（図 4-24）をもとに考古資料による中都の情報（図 4-26）の意味を特定し、その考古資料による情報の意味でもって文献資料による情報の正しさを再確認するというこの作業は、成し遂げることがそう簡単なものではないであろう。

内城の外に大きく広がる外城（外郭）の境域についても、『元中都：1998～2003 年発掘報告（上・下）』の総平面図にさらに陳氏自身の新たな現地調査を加え、結果として図 4-38 のような概念図を表示している。図のとおり陳氏の想定する外城はほぼ完全な正方形であり、陳氏はそれを内城南城壁の中央門を中心点とする正方形であると考えているのである。この図をみると、それは「考工記」の都城規画にかぎりなく近いような印象をもたざるをえないであろう。陳氏が多くの紙幅を割いて元中都の平面構造を復原したのは、もちろんそれが「考工記」都城規画の理想をかなりの程度実現していると判断しているからに他ならない。

第三節　明清都城規画対元代制度的継承与発展

この節では、明の中都・明の南京城・明清の北京城が取りあげられ、その平面構図の分析が試みられている。

まず、明の中都であるが、周知のように中都とは、洪武帝朱元璋が彼の故郷に建設し始めたものの、百パーセント完成しないうちに建設が放棄された都城であり、その遺構は現在の安徽省滁州市鳳陽県城の西北淮河南岸に残存している。

明の南京城や明清の北京城に比べれば、そもそも未完成な都城であるし、その政治的地位も当然低いにもかかわらず、陳氏はこの城市にこれまた 19 頁という大部な紙幅を割いている。やはり無主の空地に建設されたものであるから、理想的な規画がより実現しやすかったであろうとの判断にもよるであろうが、しかし、それよりも陳氏の得意とする計算法を適用するのに十分な資料的情況にあるということこそが、大部な紙幅を割いている第一の理由であろう。事実、論述の大半は王剣英・曹鵬両氏の計算法と計算に対する陳氏自

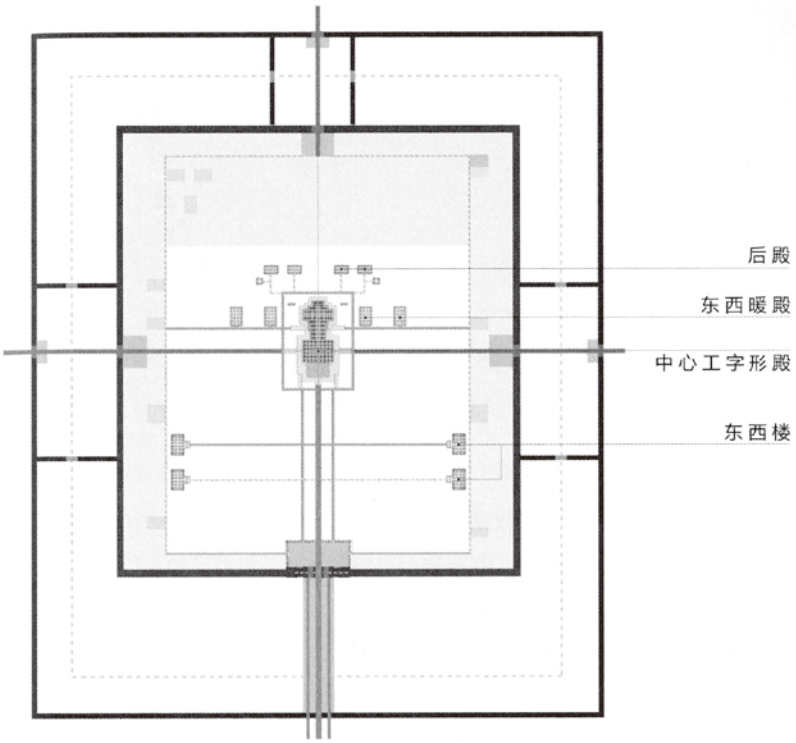


图 4－29　元中都内城平面复原图①

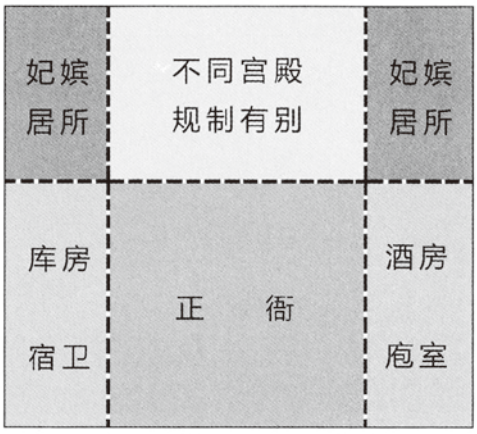


图 4－24　元大都宫殿功能布局规制示意图

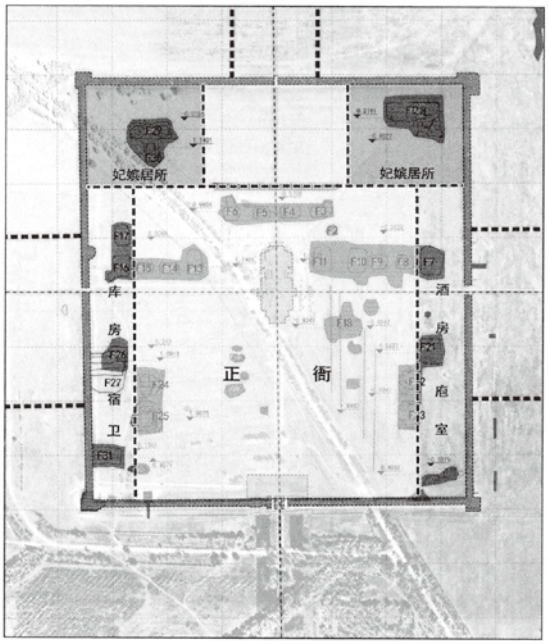


图 4－26　元中都内城建筑功能推测

身の計算法と計算の列挙であって、三者の導き出している数値の比較が連続する内容となっているのである。王氏・曹氏の成果を克服して陳氏が提出している明中都の復原図は図 4-44 のようなものであり、そのうえで、推測される当初の設計図として図 4-45 と図 4-46 の二通りをあげている。両者ともに見ての通り外郭はまぎれもない正方形であり、陳氏によればこの正方形が本来の設計であったが、地勢などさまざまな事情から外郭東城壁をやや東へ移動させざるをえず、実現されたものとしては、図 4-44 のような東西に長い長方形の外郭になってしまい、内城が西よりになってしまったとみなしているのである。

なお、明中都建造の基本定数として、外郭のそれは一辺 500 丈の正方形、内城（皇城・禁垣）のそれはおそらく一辺 250 丈の正方形であろうと想定している。また、外郭を造成する際の中心点は、内城を南寄りに設定している以上、宮城の北側―内城の北より（具体的には内城北城壁の中央門＝万歳山前面）にならざるをえない（P ―筆者のつけたもの）。もしそうであるとすると、従来の都城のそれらとは異なった特異な例であることになろう。

ついで明南京城が取り上げられ、各エリアの機能と沿革が概観される。周知のように南京城の各エリアの配置情況は一見秩序だっていないように見えるが、実はそうではなく、自然地勢によって位置自体は理想的な配置をとることはできなかったけれども、それぞれの機能についてみればそれらの配置ははっきりした秩序をもっているのであり、その意味では中都で実現された明王朝の都城規画がかなりの程度実現されていると指摘している。

最後に明清の北京城が取り上げられ、おもに次の二つの点について論述されている。一つは、永楽年間に明北京城宮城の北側に造成された人工堆積、いわゆる “鎮山” のもつ位置的意味である。陳氏によればこの鎮山は、その機能においてもその位置においても明らかに中都の “万歳山” を継承したものであり、都城の制高点であるとともに都城全体の中心点であったという。つまり、明北京城の中心点は中都のそれと同様、宮城の北側―内城の北よりであったとみなしているのである（図 4-50）。今一つは、清の北京城の各エリア配置は、支配者である満州族の特権に配慮したさまざまな設定に基づいており、そこに明北京城との相違が生じているという点である。

第四節

この節では、本章の考察をまとめて、まず五代から宋にかけては里坊制の崩壊が進行した時代であり、元・明・清は「考工記」の都城規画をほぼ全面的に実現しようとした時代であると総括し、そして、後者の事情をとくに顕著に示しているのが元の中都と明の中都であり、両者ともに未完成の都城であるにもかかわらず、その形状は「考工記」の都城規画をほとんどそのままに実現していると指摘する。なお、陳氏はここできわめて注目すべき意見を提出している。すでに見たように元中都の内城は外城内の北より、明中都のそれは外城内の南よりなのであるが、もし明中都の北―南を反転させれば元中都にまったく重なるというのである（もし元中都の南―北を反転させれば明中都にまったく重なる）。陳

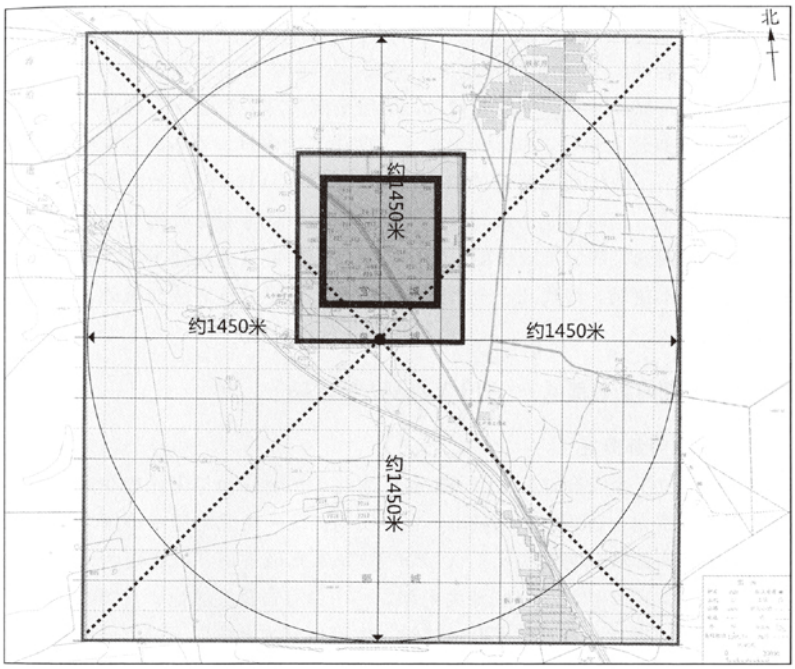


图 4－38　元中都中心点位置分析（图上一小格边长 300 米）

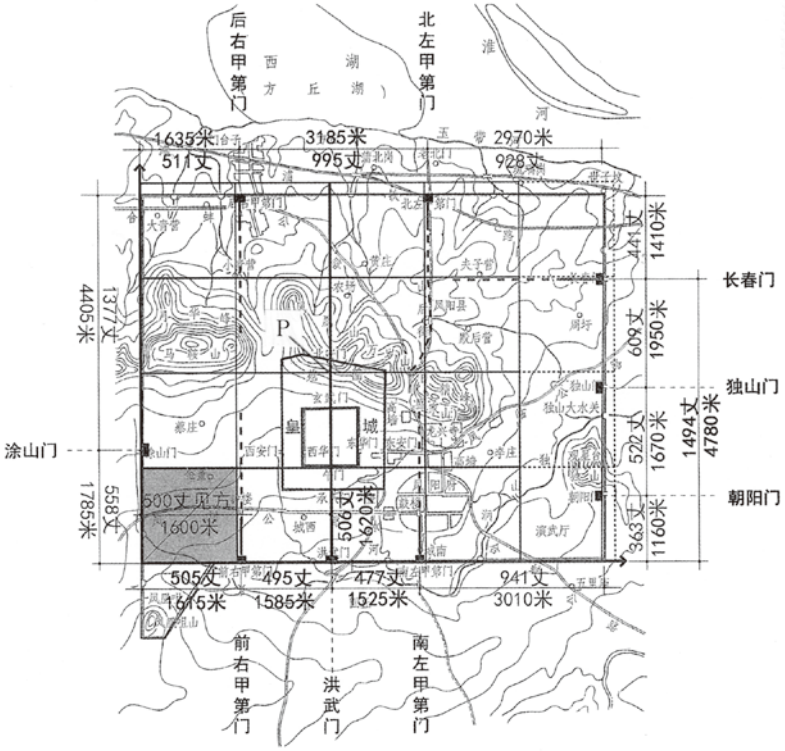


图 4－44　明中都原设计格网推测示意图①

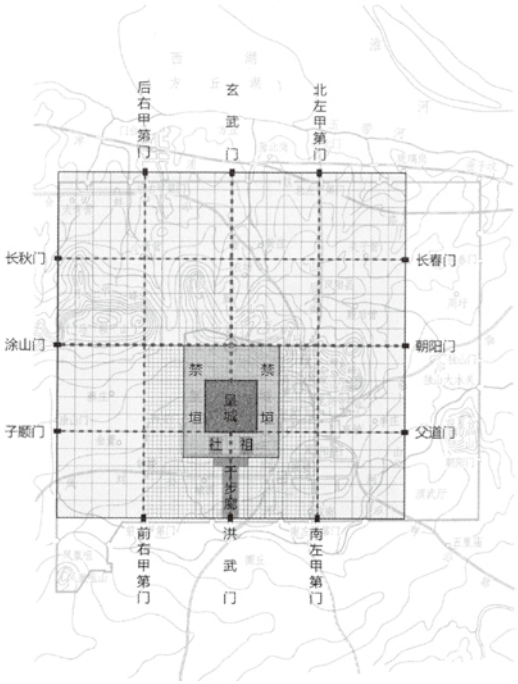


图 4－45　明中都原设计方案推测示意图之一①

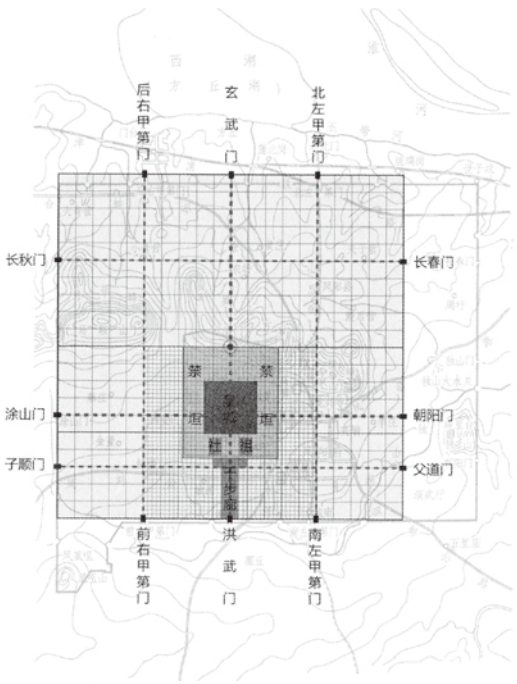


图 4－46　明中都原设计方案推测示意图之二①

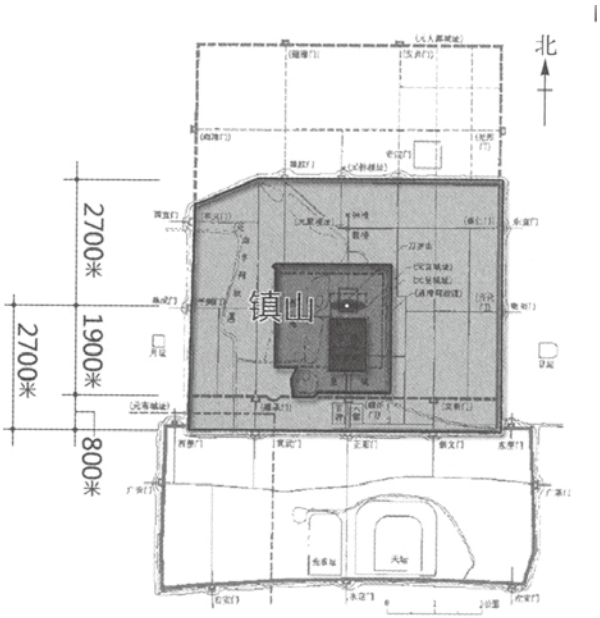
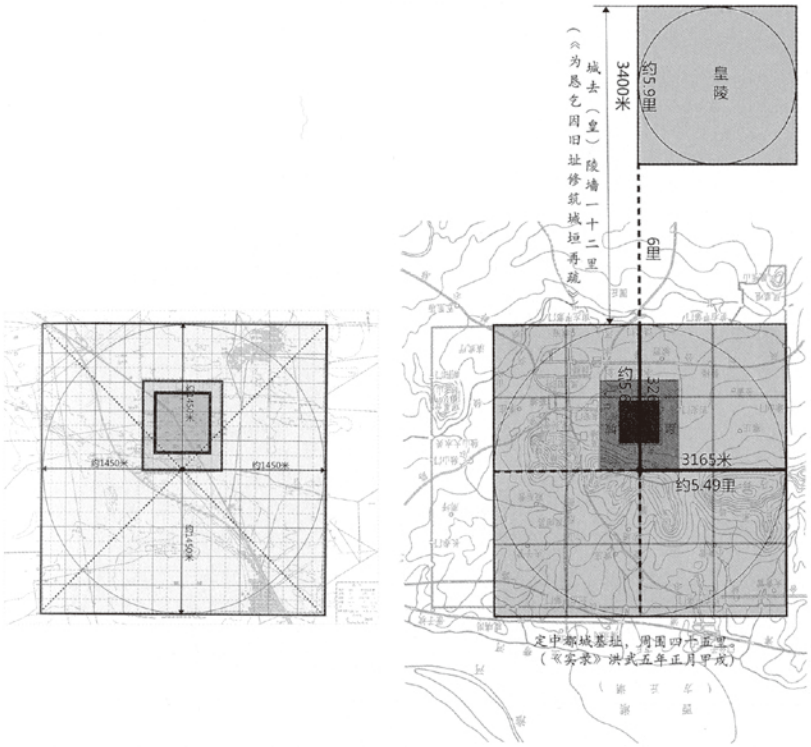
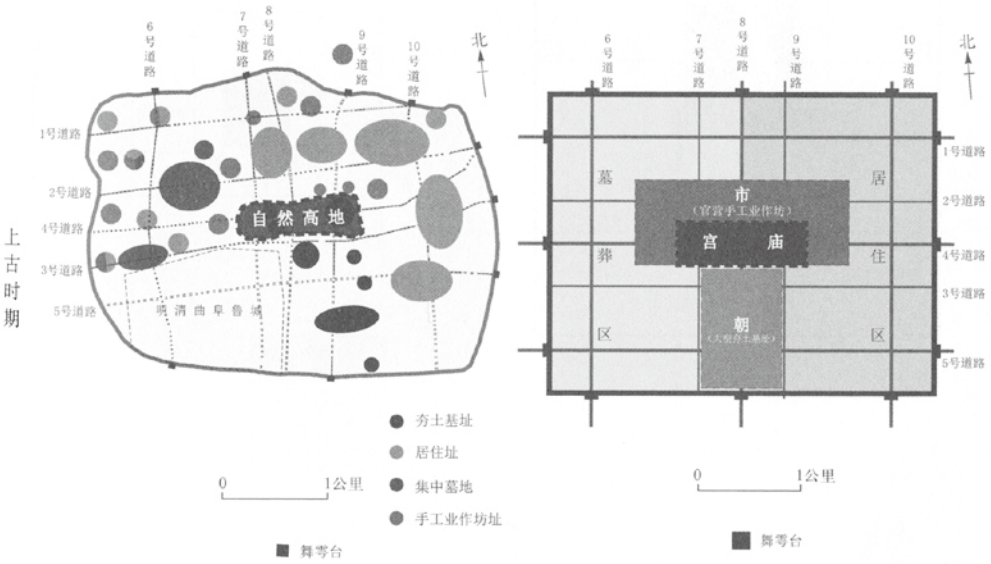


图 4－50　永乐改建后明北京城格局示意图②



元中都布局示意图（上北下南）　　明中都原设计方案推测图（上南下北）

图 4－52　元中都与明中都原初设计方案比较



考古实测　　推测规划

周代曲阜鲁城

（两周之际至春战之交）图 5－6　中国古代理想城市的功能构成

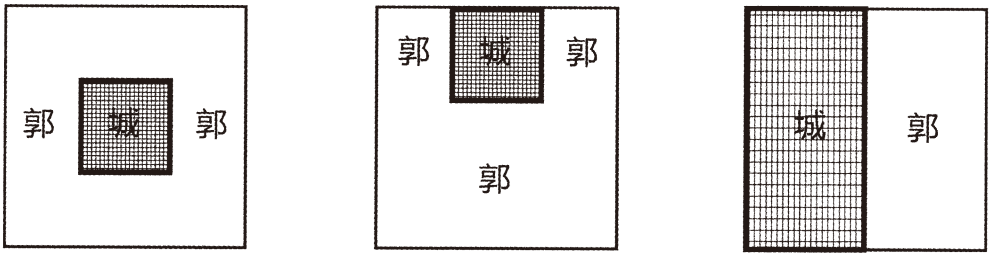
氏がどのような意図をもってこのような大胆な意見を提出しているのか残念ながら説明はないが、興趣をそそられる意見であることはまちがいない（図 4-52）。

第五章　中国古代理想城市的形態特徴

第一節　尊崇経典―中国古代理想城市的辺界与分区

この節では、前章までの考察をもとに、歴代王朝が理想とした都城の形状のそれぞれについて知見をまとめている。

1. 陳氏によれば、中国古代の都城には、次の三種類の形状が見られる。



重城相套　　重城相叠　　双城并立

図５－１　“城―郭”二重结构的典型布局模式

このうちもっとも一般的に見られるのは、宮城を中心に四方に等間隔的に内城・外郭が広がっている「重城相套型」であり、それは五服の制度に示されるような、帝王を中心点にしてそれを囲むように各区画が同心方形的に広がるべきであるという、中国固有の政治思想を反映していると指摘している。

2. 外郭の形状は、時代をおうごとに正方形に近づいていっており、五代北宋汴梁城や元の中都城のそれはほぼ完全な正方形を呈するに至っている。それはあたかも「考工記」の “方九里” を実現しているかの感があると指摘している。
3. 宮城面積が全城（外郭）面積に占める割合は、前漢長安城などの特殊な例を除けば、外郭を修築していない段階では 5 パーセント以上、外郭を本格的に修築するようになって以降は（北魏洛陽城以降）おおむね 5 パーセント以下であるという。また内城のそれについては、隋唐長安城以前は 10 パーセントを越えているものの、隋唐長安城からはおおむね 10 パーセントを越えなくなると指摘している。（中国の都城は、漢代以降、宮城・内城＝皇城・外郭という三重城壁をもつようになるという通説的意見に、陳氏ももちろん従っている）。
4. 魯都曲阜城においては内城がほぼ中央に配置されているが、のちの東魏北斉鄴城や隋唐長安城では北より（内城北城壁と外郭北城壁が共有される）に配置されており、

「考工記」の都城規画から少し離れてしまったように思われるものの、それが元中都や明中都になると再び中央よりに配置されて「考工記」の都城規画にまた近づいたことが見てとれるという。

第二節　漸趣世俗—中国古代都城的功能構成与分布

この節では、前章までの考察をもとに、各施設・各エリアの機能及びその配置場所の変遷についての知見をまとめている。

1. 「考工記」が伝える都城内の主要な施設は、王宮と祖（宗廟）・社（社稷）・朝・市であり、歴代都城でも祖・社・朝は原則として内城内に置かれ、市は当初から内城外＝外郭域に置かれることが一般的であったという。具体的にいえば、① 宗廟と社稷は本来は王宮と同一エリアにあり（これがいわゆる宮廟一体である）、「考工記」都城規画ではいずれも王宮の内側に配置されていたと思われるが、その後しだいに王宮から離れてその外側の内城内に配置されるようになり、その情況は後世の都城までずっと継続された。ただし元大都は内城からも出て東西の外郭域に設置され、元中都もそうであった可能性がある。② 市はもとより、宗廟・社稷も時代をおって王宮から離れていき、ついには宗廟・社稷が内城からも出される事態さえ生じることになったが、その変化は中古から近古への時期、つまり唐～宋の変革にともなって生じたものである。
2. 「考工記」に見えていない機能エリアとしては墓地や各種の祭祀施設があるが、墓地については、遠古時代には極端な場合、宮城内に存在した例もあったと思われるものの、周代以降一般に外郭に置かれるようになり、戦国時代以降はさらに外側の外郭外＝郊区に置かれるのが一般的となったと指摘している。祭帝祭天・天子親耕・王后事蚕・祭祀日月・庠序辟雍などの祭祀施設は周代からすでに外郭外＝郊区に置かれたようであり、その後の歴代都城もそれを踏襲したと考えられる。
3. 「考工記」に見えていない施設としては、漢代以降の仏寺・道観・園林もあるが、北魏洛陽城や隋唐長安城など、それらの配置が都城の景観や住民の生活に大きな影響を及ぼした例がある。

なお、この節の末尾で魯都曲阜城の朝をとりあげ、それは自然高地（曲阜）の南面ではなかったろうかと推測している（図 5-6・上古時期）。そうすると、朝が内城外に配置されていることになるが、陳氏がどのような意図をもってこの推測を提出しているのか、残念ながら読み取ることができない。

第三節　自承伝統—中国古代理想城市的空間組織

この節では、前章までの考察をもとに、歴代の都城建設において実施されたと思われる平面幾何学的な基準についてまとめている。

1. 歴代都城にはもちろん大小があり、内部の区画配置にももちろん差があるが、外郭大城壁に穿たれた城門の数（おおむね 12 門）とその城門につながる碁盤状大街路の数にはほとんど変化がなかったし、王宮を通る南北主軸線を設置して各施設を東西対称の位置に配置するという設定においても、ほとんど変化はなかった。
2. 外郭城壁の設置状況から推測すると、その設置には中心点が設定されていたと考えられ、魯都曲阜城・東魏北斉鄴城・元中都・明中都のそれがその代表例である。
3. 都城の平面設計には基準定数（設計模数）が用いられており、魯都曲阜城や東魏北斉鄴城で用いられた一里四方の正方形、隋唐長安城で用いられた 500 丈四方の正方形、明中都で用いられた 500 丈四方の正方形（外郭）と 25 丈四方の正方形（内城）が代表例である。

第四節　中国古代理想城市対周辺地区都城形態的影響

この節では、朝鮮半島・日本・ベトナムの都城をとりあげ、「考工記」都城規画理念のそれらへの影響を概観的にまとめている。

朝鮮半島の都城については、高句麗の平壌・長安、百済の泗沘、新羅の慶州、高麗の開京、李氏朝鮮の漢城が列挙され、平壌の規画が南朝建康のそれと似通ったところがあること、長安の里坊と道路が軸線を基線に配置されていること、泗沘の王宮―里坊の配置などが中国歴代都城のそれと似通っていること、開京の宗廟・社稷の設置は中国歴代都城のそれを模範としている可能性があること、漢城の建設には儒生がかかわっており、開京よりも儒家思想的理念がさらに意識された可能性があり、またその中軸線の設定は明の中都・北京のそれを模倣した可能性があることなどを指摘して、多かれ少なかれ「考工記」都城規画の影響を受けていることはまちがいないとしている。

日本の都城については、藤原京・平城京・長岡京・平安京を列挙し、藤原京が「考工記」都城規画にほぼ忠実に内城（藤原宮）を中央に配置しているのに対して、平城京･長岡京･平安京がそれを北よりに配置しているのは、藤原京の規画よりも隋唐長安城のそれをより強く模倣したためであろうと指摘している。

ベトナムの都城については、ベトナム李氏王朝の昇龍（ハノイ）と阮氏王朝の順化（フエ近郊）を列挙し、昇龍城は復原状況が不十分でその構造がはっきりしないものの、順化城は、太和殿―午門―南城壁中央門という中軸線の設定や宗廟・社稷とおぼしき施設の配置が「考工記」の都城規画のそれに符合していることはまちがいないし、宮殿名・門名のいくつかにいたっては、明清北京城のそれをそのまま使用しているものもあると指摘している。

最後に、妹尾達彦氏の意見を引用しつつ、東アジアの諸国家が中国各王朝の制度を多くの点で模倣したことはまちがいないのであるから、都城の構造においても何らかの点で中国都城のそれを模倣したことはまちがいないとして、朝鮮半島・日本・ベトナムの各都城において「考工記」都城規画の実現がはかられたことは当然であり、その意識はおそらく

時代を下がれば下がるほど強くなっていったであろうと想定している。

第五節　中国古代理想城市的特徴—基于中外理想城市的対比研究

この節では、インド・イラン・ヨーロッパの都城規画の理念とその実現例をいくつか列挙して、中国のそれとの比較を試みている。インド・イラン・ヨーロッパの関連資料を説明した部分は、簡潔ではあるが要をえており、この論述もなかなかに読み応えがあるといえよう。その論述の内容は、表 5-7 に集約されており、中国と他の地域との異同は次のようにまとめられている。① 中国やインドでは正方形の城圏が志向されているが、対してシュメールや古代ヨーロッパでは円形や多辺形が志向されている。② 城市の幾何学的中心点は、中国では宮城におかれることが多いが、対してハラッパ文明地区では寺廟と王宮、シュメールでは寺院と広場、古代ヨーロッパでは神廟と広場あるいは教会と市場におかれることが多い。③ 中国では道路を格子状に配置することが一般的であるが、対してシュメールや古代ヨーロッパでは放射線状に配置することが多い。④ 中国ではただ一本の南北主軸線を設定し、その軸線に整合するよう建築物を配置するのが一般的であるが、対してハラッパ文明地区やシュメールでは軸線は複数存在するし、古代ヨーロッパでは何本もの軸線が放射線状に設定されている。⑤ 各地の古代文明地区には、それぞれ理想とする都城規画理念があったはずであるが、数千年にわたって一つの理念が意識され続け、数千年にわたってつねにそれを実現しようとする試みが続いたのは、おそらく中国の「考工記」都城規画理念だけであろう。

結　　語

ここでは本書の結論が述べられる。

まず本書がとりあげてとくに精密に考察を施した魯都曲阜城・東魏北斉鄴城・隋唐長安城・元中都・明中都についてその結果を示し、魯都曲阜城・東魏北斉鄴城・元中都の構造は「考工記」の都城規画理念に基本的に合致しており、隋唐長安城と明中都は、ほぼ合致してはいるものの、その合致度は三城よりやや劣るとしている。そして、以下の点を取りあげるべき本書の結論として掲げている。

1. 魯都曲阜城の規画が「考工記」都城規画理念の、主要な淵源の一つであったことはまちがいない。ただし、細かくみれば「考工記」には曲阜城には見られない要素が加えられており、それはおそらく「考工記」がその成書の過程で魯都曲阜城建設以降＝戦国時代以降都城の実際の形態を反映させているためであろう。
2. 上古時代の理想城市である東魏北斉鄴城と近古時代の理想城市である元中都は、その構造がともに「考工記」都城規画理念の影響を強く受けているが、ただ、「考工記」都城規画の内容をどのように解釈するかにあたっては、両者で少し相違があったこ

とが知られるし、また一方、どちらの場合においても先古を追慕するいわば尚古の気風が必ずはたらいていたことが知られる。

3. 唐宋時代以降の儒教思想の深化、復古思想の台頭にともなって「考工記」都城規画理念の影響もより強まっていった考えられ、したがって近古時代の末段になって、その影響の到達点として、「考工記」都城規画をほぼ完全に実現した都城が登場しているのである。

*

以上、陳篠氏の著書を章・説を追って紹介してきた。陳氏の論述は詳細・精密をきわめており、それだけに難解な部分も多い。正直に白状すれば、論旨を把握できなかった箇所もあり、はなはだこころもとないのであるが、しかしそれぞれの骨子ははずさなかったつもりである。以上をもってほぼ正確に紹介しえたということで、ご了承願いたいと思う。

さて、陳氏によって、中国歴代都城の最新にしてかつ数学的にもっとも精緻な復原図が提出されたという学術的価値を、まずは認めなければならない。その復原の精密さは、目下の中国都城史研究において、いわば頂点をきわめているといってよいであろう。もちろん、陳氏の用いている資料処理方法が正しいかどうか、つまり用いられている数学的処理が正しいかどうか、したがって復原された結果が正しいかどうか、それに、そもそも設計者たち自身がほんとうにそのような数学的処理を行ったのかどうか、問題にすべきことは多いであろうが、しかしともかく今は、そういった議論の前提となる復原図が提示されたという、そのこと自体の価値を虚心に肯定すべきであろう。

陳氏の詳細・精緻な論述を支えているのは、第一に幾何学的計算である。残存する数値から計算法を復原し、そこから逆に数値を再確認し、再確認した数値からさらにまた計算法を復原するという演算を次から次へと繰り返して、残った唯一の演算結果を提示しているのである。電卓を横において読解に取り組まねばならず、読者は苦心するであろうが、それだけに苦心しがいのある知見を得ることができるのである。陳氏のその演算をささえる二つの視点が、設計模数（基本定数）と全城の幾何学的中心点であることは、本書を読めばすぐに理解されるであろう。第二に、陳氏自身による現地調査の成果である。それも、従来のような単純な発掘調査ではなく、GPS やドローンを導入した最新の科学的手段をもってしたものであり、その結果得られた新しい数値が陳氏の詳細・緻密な論述を十分に補完していることを、行文の随所で確認することができるであろう。

できれば陳氏に直接お聞きしたい疑問もあり、それを論評として示してもよいのであろうが、そういった論評はいずれ後日を期することとして、ここでは、読み進めながら最後まで一貫して脳裏から離れなかった三つの問題を提出して―その問題は陳氏個人に対するものであるというよりは、自身を含む都城史研究者全体に対するものなのだが―、この紹介文をしめくくりたいと思う。

第一は、『周礼』「考工記」“匠人” にみえる都城規画を歴代都城の設計者たちが、いっ

たいどのようなものとしてとらえていたかという問題である。

周知のように、匠人条の当該文章はきわめて簡単なものである。この文章だけでももって都城の内部を構成してみろといわれても、それはどうみても無理である。描けるのは九里四方の正方形と各辺三基ずつの城門ぐらいで、九経・九緯の道路、宗廟・社稷・朝・市はどこにどのように配置してよいか皆目わからないし、そもそも王宮がどこにあるのかどこにも示されていない。にもかかわらず、古くは漢代から今日に至るまで、多くの学者が城壁・城門・王宮・道路・宗廟・社稷・朝・市を配置した「考工記」都城図を提示しているのは、いうまでもなく「考工記」匠人条の当該文章以外の情報を援用しているからである。その以外の情報とは、一つはおそらく“常識”であり、一つはもちろん「考工記」以外の文献伝承であり、そして近年ではこれに考古資料を加えねばならないであろう。その以外の情報をどう処理するかは、個人によって相違があるであろうから、「考工記」都城復原図も個人によってその結果は当然違ってこざるをえない。陳氏が紹介している 9 個の「考工記」王城復原図に見られるように、参照すべき数多い復原図が互いに異なっているのは、いわば必然なわけである。

したがって、歴代都城の設計者たちの考えた復原図も決して同じものではなく、相互にそれなりの相違点をもっていたと考えねばならない。「考工記」都城構造により近いかより遠いかといっても、そもそも依拠した復原図が違っていたとなると、近い遠いを判定することは、あまり意味のないことになってしまうであろう。実のところ各設計者たちの考えた各復原図を再現することは資料的に不可能なのであり、手の打ちようのない問題なのであるが、陳氏の著書を読過しつつこの問題が脳裏から離れなかったことを、一応注記しておきたい。

第二は、宮城・内城・大城・外郭という表記を、その表記にどのような意味合いをもたせてどのように使い分けるかという問題であり、とくに内城と外郭をどう使い分けるかという問題である。陳氏著書のなかから参考事例をあげるとすると、陳氏は偃師商城の東城壁 1,770 m・西城壁 1,710 m・北城壁 1,240 m・南城壁 740 m の城圏を北郭・郭城とよぶ一方、鄭州商城の東城壁 1,700 m・西城壁 1,870 m・北城壁 1,690 m・南城壁 1,700 m という城圏を内城とよんでいる。（陳氏の掲げている両者の示意図は図 2-4 と図 2-5 である）。鄭州商城のその城圏の外側には、不規則形のさらに広大な城圏が存在しており、それを外郭とみなせば、その内側の城圏は内城としかよびようがないのであろうが（多くの考古学者がこの立場に立っている）、しかし、ともに同じく商王朝の都城と考えられる二つの都城遺跡の、ほぼ同じ規模の城圏を、偃師のそれを外郭、鄭州のそれを内城とよぶことには、何か違和感を覚えないであろうか。もちろん、内城・外郭という表記は、大小よりもむしろその機能によって使い分けられるべきであり、偃師商城のそれは外郭の機能をもち鄭州商城のそれは内城の機能をもっていたためであるといえば、それですむのかも知れないが、鄭州商城のそれの内部機能が今ひとつはっきりしないことを思うにつけても、疑念をはらうこと

ができないのである。

ここでこの問題に深入りすることは避けるつもりであるが、とりあえず二つのヒントをあげておきたい。

1. 『周礼』「考工記」の作者は、どのような情報を参考にして「考工記」を書いたのであろうか。おそらく当時の儒家思想と、いまだ存続して存在している、あるいは遺跡として残存している先秦時代各都城の構造が参考になったことは間違いないであろう。後者についていえば、「考工記」の成書時期が前漢であったとしても、作者たちが先秦都城の遺構を実見したり、あるいはその情報を入手していたりしていた可能性は当然考えねばならないし、戦国であればなおさらのこと、現に存続している都城を実見していた可能性もあるのである。したがって、「考工記」の執筆にあたって、そういった現実に存在する先秦都城の規模や構造からかけ離れた、常識はずれの規模や構造を「考工記」都城規画に取り入れることは、事実上やはりできにくかったであろう。もし成周城の情報をもっていたとすれば、それに相応ずる規模と構造を取り入れたはずなのである。

そこで “方九里” という設定が注目されてくる。九里の九は、もちろん天子の聖数を意識したものであろうが、ただ、この数値が先秦都城城壁規模の現実にほぼ相当しているという理由も考えてよいのではなかろうか。考古資料によるかぎり、東周城の規模はもとより、先秦列国都城の規模は、そのもっとも外側の城圏が、一辺が 3 千数百メートルであるのが通例で、一辺が 4 千メートルを越えるものはごく少数であるのが現実であり、方九里（およそ 3,600 m）はこれにほぼかなっているのである。そして、『孟子』「公孫丑・下」の “三里之城、七里之郭” という記事を持ち出すまでもなく、この 3 千数百メートル～4 千メートルという城圏は、文献伝承では一般に郭（外郭）とよばれていた（『春秋左氏伝』では “郛”）。—『孟子』があげているこの七里は列国都城のそれであると思われ、『孟子』は意図的に天子の九里から一等下げたのかも知れない—。「考工記」のいう方九里は、先秦都城の現実に照らせば、実は方九里の外郭なのである。方九里の内側を九経九緯の道路が走っていたという設定からしても、「考工記」の作者が、方九里は実際には外郭の規画であると認識していたと思うのであるが、どうであろうか。この点、陳氏自身が、

> 中国の歴史上、時代が下がれば下がるほど、“外郭” の形状は限りなく正方形に近づくようになり、それはあたかも「考工記」が描いている王城 “方九里” の制度に近づいていっているかのようである（345 頁）。

といっているのは、まことに興味深い。

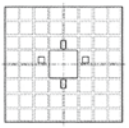
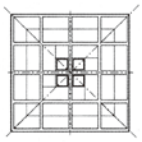
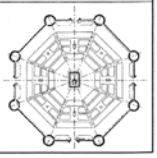
2. 『越絶書』「外伝記呉地」は先秦呉国都城時代の呉城の城壁として次の 4 城壁をあげている。

大城 : 周四十七里二百一十歩二尺

郭 : 周六十八里六十歩。

小城 : 周十二里。

表 5－7　不同的古代文明的理想城市模型比较

文明区	古代中国——《考工记》	古代印度——《政事论》	古代伊朗	古代欧洲——《建筑十书》
边界形态	方形	方形	圆形	正多边形
中心功能	王宫	寺庙	王宫	神庙及广场/教堂及市场
轴线方向	正南北、东西向	正南北、东西向，东北、西北、东南、西南向	指向圣地	多方向
路网形式	正交形	正交形	放射形与环路结合	放射形与环路结合
图示				

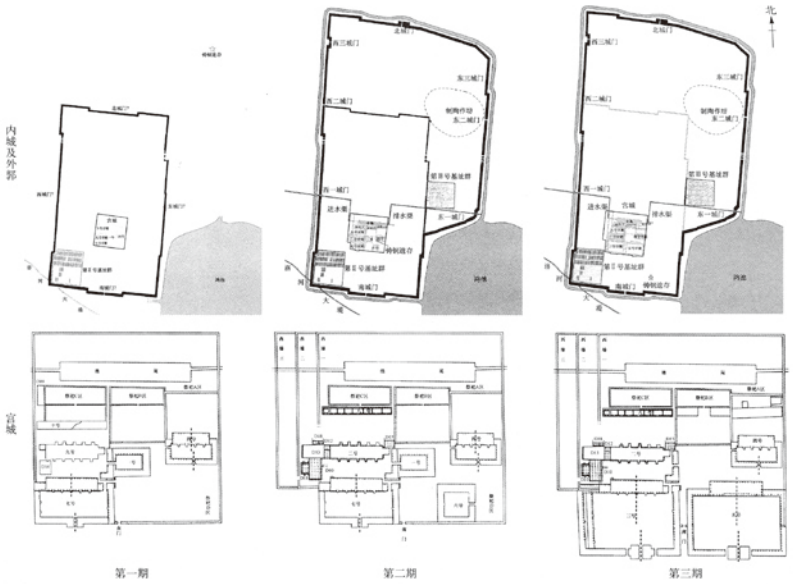
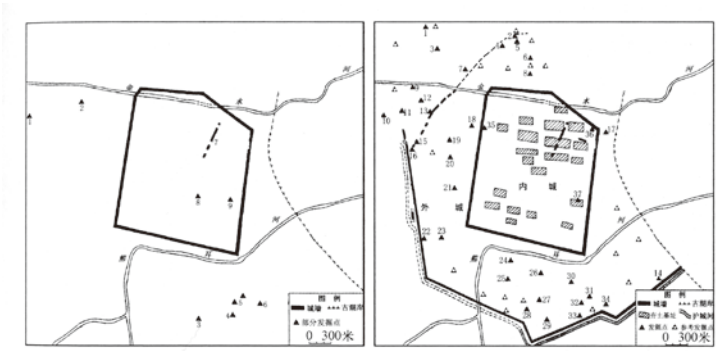


图 2－5　偃师商城布局演变示意图①



肇始阶段（二里头文化至二里岗文化过渡期）　　鼎盛阶段（典型商代二里岗期）

图 2－4　郑州商城布局演变示意图①

伍子胥城：周九里二百七十歩。

この 4 城壁すべてが先秦呉国の呉城に実際に存在したのかかどうか、残念ながらはっきりしないが、小城もしくは伍子胥城が、『越絶書』成書時期にもいまだ残存していたと思われる呉城内城の遺構であることには問題ないであろう。問題は、大城と郭の関係である。この問題を解決するカギは『三国志』「呉書」孫権伝の裴松之注にある。呉都呉城の大城西城壁に昌門（闔門）という城門が存在したことはよく知られているが、その遺構は三国時代にも残存しており、それについて裴松之は “呉西郭門” と注記している。つまり時代のさがる情報ではあるけれども、呉都の大城はまた “郭” ともよばれたことが知られるのである。おそらく、呉都の大城はその規模からいっても往時の外郭壁であったに違いない。ところが、さらにその外側にいつしか今一つの郭域が広がるようになり、その最外部の郭が “郭” とよばれるとともに、その郭と区別するためにそれまでの “郭” は大城とよばれるようになったと想定される。大城というよびかたは、もちろんその城壁が大きかったためであろう。しかし、さらに時代が下るとその最外部の郭域はいつしか消滅してしまい、大城が再び最外部の郭域となって、そこはかつてのとおり郭とよばれるようになったと考えられる。裴松之はそこで大城西城壁の昌門（闔門）を西郭の門といっているのである（このあたりの議論については拙稿「蘇州古代史（一）―城郭構造―」（『東北学院大学論集歴史学・地理学』25 号参照）。

要するに呉都呉城の遺構には、いつの時点からはじまったかは明らかではないけれども、周長 47 里あまりの郭壁とその外側の周長 68 里あまりの郭壁という二つの郭壁があり、最外部の郭域を郭とよんだため、それと区別するためにその内側の郭は大城とよばざるをえなくなったが、その後、いつしか最外部の郭域が消滅したため大城はふたたび郭とよばれるようになったということになろう。（というよりも、二つの郭が並存した時期においても、内側の郭が、“大城”・“郭” の二つの名称を併用していた可能性が高いであろう）。

以上の二つのヒントをもとに、偃師商城と鄭州商城についての内城・外郭というよび名を次のように想定してみてはどうであろうか。

図 2-5 の偃師商城の場合、第一期の城壁は “内城” とよぶべきであり、真ん中南寄りの区画は王宮などの宮殿区である。第二期になると、内城の北側と東側にせり出すように、大きな面積をもった城圏が広がり城壁が築かれるが、これは “外郭” である。この想定は陳氏のそれとまったく同じである。図 2-4 の鄭州商城の場合、肇始段階の周長約 6,900 m の城圏は “外郭” であり、宮殿区を囲む “内城” はおそらく外郭内の東北部に存在したと考えられる。ところが鼎盛段階になると、肇始段階の外郭の外側にさらに郭域が広がって、その新しい郭域を囲むように郭壁が築かれることになり、ここに二つ目の外郭が形成されることとなった。鄭州商城には二つの外郭が存在することになったわけであるが、もし内側の外郭の機能が “内城” の機能に変質したのであれば、これを “内城” とよび変えてよいのかも知れない。しかし外郭の機能に何ら変化がなかったのであれば、これを “内城” と

よび変えては、事実にもとることになろう。何ら変化がなかった場合、今ふうにいえば、先の外郭は第一外郭、後の外郭は第二外郭とでもよぶのが適切であろう。

商代に城・郭の区別があったのかどうか、商代に城・郭の機能の差異があったのかどうか、そもそも不明なのであるから、なんとも言いようがないのであるが、しかし、内城・外郭の区分がはっきりしていた東周時代の人々が、もし偃師商城と鄭州商城の城壁配置をみて、自分たちが使用している城・郭という表記でもってその配置を説明しようとしたなら、おそらく以上のように説明したにちがいない。

内城・外郭という表記は都城史研究に欠かせない表記であるけれども、その使い分けには十分な注意を払わなければならない。周知のように北魏洛陽城の内城は、後漢洛陽城の大城をそっくりそのまま使用している。北魏洛陽城の内城は確かに内城の機能を備えていると思うが、だからといって、同じ城壁を使用しているのであるから後漢洛陽城の大城もやはり内城であったと単純に考えるのは、不注意のそしりをまぬかれない。後漢洛陽城の大城が内城であったかどうかは、そこが内城の機能をもっていたかどうかを仔細に検討して、はじめて決定できるのである。内城かあるいは外郭か、それを決定するためのこの仔細な検討は、もちろん歴代都城のすべてについて必要であろう。

総じていうならば、内城も外郭もその規模は時代をおうごとに広大化していっている。また内城といっても外郭といっても、その機能は少しずつではあるけれども変化していっている。「考工記」の都城規画が歴代都城の構造にどのような影響を与えているかを考察するに際しても、この広大化と変質に十分留意しつつ、内城・外郭の表記を使い分けねばならないと思う。

第三は、歴代都城のそれぞれの城門の設置場所とそのそれぞれの門のもつ政治的・宗教的意味は、「考工記」都城規画の影響をどのように受けていたであろうかという問題である。

都城にはいわば幾何学的な中心点が設定されており、その中心点から四囲にむかって等間隔に外郭が設置されたというのが、陳氏の重要な視点の一つなのであるが、北魏洛陽城と東魏北斉鄴城の場合、その中心点は閶闔門であった。それは、いうまでもなく閶闔門が重要な政治的・宗教的意味をもっていたからであり、そのことには陳氏自身も渡辺信一郎氏の意見を引用しながら言及している（370 頁）。閶闔門がたとえば曹魏の洛陽城においていかに重要な城門であったかについては、よく引用されるものであるが、次の一文でもって説明することができる。

> 若且先成閶闔之象魏、使足用列遠人之朝貢者、脩城池、使足用絶踰越、成国険、其余一切、且須豊年（『三国志』「魏書・王朗伝」）。

周知のように、洛陽城に大改造を加えたのは曹魏の明帝であるが、その大規模な土木工事が財政の逼迫と国民の困窮を犠牲にしたものであったことは想像に難くない。次々と宮殿を新建しようとしている明帝を諫めたのが王朗であり、上の一文はその諫言の一節に他ならない。ここで王朗は“都城にとってまず必要不可欠なものは象魏をもった閶闔門であ

り、それは遠くからの朝貢者を門前の広場に並べて皇帝の威厳を示す必要があるからです。もう一つ必要不可欠なものは城壁と濠池であり、都城に勝手に出入するのを防ぎ、都城の固めとする必要があるからです。その他のものは、豊年を迎えて財政に余裕ができてから建設すればよいのです”といっている。つまり、王朗にいわせれば、閶闔門はこれがなくてはそもそも都城たりえない、なくてはならない施設であるというのである。象魏とは周知のように、城門に懸けられた一種の看板であり、城門前の広場に集まった人々に帝意を知らしめる装置であった。儒教の経典では、その門は応門となっているのであるから、洛陽城の閶闔門は往時の応門の機能を果たす門として設置されていたと考えねばならない。そのような重要な門であるからこそ、北魏も曹魏のそれをそのまま受け継いだのであろうし、そしてそのような重要な門であるからこそ、北魏洛陽城の幾何学的中心点とされたのであろう。（応門と閶闔門の関係については、拙稿「応門から閶闔門へ―中国都城の門朝城郭構造研究序説―」『東北大学東洋史論集』第十二輯参照）

繰り返してくどいようであるが、『周礼』「考工記」“匠人”の条には王都を構成する要素として、方九里の城壁・一辺三基の城門・九経九緯の道路・宗廟・社稷・朝・市及び夏・商・周の宮室があげられているが、それとともに廟門・闈門・路門・応門の四門があげられている。数多かった思われる諸門のなかで、とくにこの四門もあげられているのは、これが都城の構成要素として必須不可欠の門であったからであることはいうまでもない。応門もこの四門に入っているのである。したがって、「考工記」の都城規画が歴代都城の構造にどのように反映されているかを考察しようとするなら、この四門に応ずる門がどこにどのように配置されているかを検討することもまた、なおざりにしてはならないであろう。

*

冒頭にも記したように、今実施している共同研究の課題は「中国歴代都城の宮廟官寺・門朝城郭配置構造を正確に復原するための遺跡現地共同調査」というものである。このうちの宮廟官寺の配置構造と城郭の配置構造についていうかぎり、陳氏の研究書が数多くの新資料・新学説を提供してくれたことはまちがいない。以降、研究メンバーはこの研究書を座右のハンドブックとして、研究を推進することになろう。ただ門朝の配置構造については、陳氏はほとんど述べることがない。しかし、賢明で周到な陳氏がこの課題を意図的に無視するはずはないのであって、今回は著書に取り入れなかったけれども、機会があればこれに取り組もうと思っているであろうことは、容易に察することができる。陳氏がもしこの課題に取り組まれることになったならば、ぜひ共同研究に参加していただきたいと、心から希望してやまない。その日が一日も早く訪れることを、切に願っている。